

---

# 聖なる夜は君と・・・

こつぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖なる夜は君と・・・

### 【Zコード】

Z2403B

### 【作者名】

こつぶ

### 【あらすじ】

聖なる夜に大切な人と過ごしたい。それはだれでも思っているはずで。その日、毛利蘭は今年は一緒に祝えない彼のことを思い、空を見上げていた・・・。原作24巻ごろが元となっています。まだ、園子＆京極さんが恋人となっていない時期の話。コナン小説リングに投稿させていただいたものの、改正版となります。脱稿と、行変換ぐらいだとは思っているのですが（苦笑）読みやすいようにするつもりです。よろしくお願いします。

12月24日、クリスマス・イブ。

その日はイエス・キリストがこの世に誕生した前夜である。

町中、いたるところに華やかな音楽、キラキラ光るイルミネーションに包まれて、幻想的なイメージをそそられる。

子供たちはそりに乗つてやつてくるひげもじやのサンタクロースを待ち焦がれ、恋人たちは甘い甘いひと時を送つている。きっと、誰にとつても特別な日。

『それなのに・・・アイツは来ない。』

リビングで鐘打つ深夜11時を知らせる音色を聞きながら、その少女、毛利蘭は自室に籠り、ふうっと深い吐息を一つだけ零した。

今日は園子の家でクリスマスパーティーだった。いつものように、コナンと2人で参加して。小五郎は探偵仲間と集まつて徹マンするとか何だとか言って、早くから家を出ていた。

思つたとおり鈴木家のパーティーは、たいへん豪華で、著名な政治家やどこの財閥の御曹司、芸能人、作家、スポーツ選手などが一同に顔をそろえていた。・・・そう、それはそれで楽しかった。だけど、なんか物足りないような気がして・・・。

それは目の前のあの二人を見てしまったからだろうか。再会を喜びあう、一組のカツプルのドラマみたいな一つのシーンを。蘭はあの瞬間の煌びやかな大広間の中で一際目立っていたお姫様と白く輝いた道着を着込んだ和装の王子　　その一人の主人公のワンシーンを目蓋の裏に映そと、ゆっくりと瞳を閉じた。

あの、一時間前のウソみたいなドラマティックな出来事をまるで自分と行方の知れない幼馴染に重ね合わせようとでもするかのように。

## 1 (後書き)

全部読みやすく替えてみましたー。

6時から行われていた毎年恒例の鈴木邸のクリスマスパーティーも既に終盤に差し掛かり、辺りには酒を飲みすぎて、頭の先から爪先まで真っ赤にさせた人、帰り支度を始める人など少しづつ出始めたころだつた。

「はああ・・・」

胸元を大胆に開けて、太股を露にした真っ赤なドレスに、同じ色のバラの刺繡がレースで編みこまれたショールを羽織り、化粧もゴージャスに決めていた園子は憂鬱そうにテーブルに突つ伏した。

「こーんな服とマイクで男を誘おうとしても所詮無理つてコトよね。大体、鈴木財閥の開いたパーティで主役のお嬢様を差し置いて、その友達を誘惑するつて何事？？大体蘭にはねえ、新一くんつていう、心に決めたダンナ様がいるのよ。来る人来る人、どうしてみんな蘭に向かつて、『さすが鈴木財閥のご令嬢だ』とか『お美しくなられて・・・』とか言うわけ？鈴木財閥ご令嬢はアタシだつての！」  
「園子姉ちゃんの服装が、キヤバクラ嬢にしか見えないからじゃないの？」

ぼそり、とコナンが小さい声で呟くと、

「何ですつて！？」

案の定、バチンッと鉄拳が彼の頭に鋭く直撃した。

「イテテテ・・・」

「ばかねえ・・・」

蘭はそう苦笑しながら、彼の頭をヨシヨシと労わるように撫でてやる。

彼女のドレスは控えめな紺色で、胸元の銀のペンダントが印象的だ。園子が数着あるドレスを貸してくれるとは言つた厚意を柔らかく遠慮して自分の家から持つてきただもの。そういう気遣いは彼女は好きではないからだ。なのに、確かに彼女がこのパーティ会場に姿

を現したときからこうこうアプローチが後を絶たない。もちろん、その横で不機嫌になるのは園子だけとは限らず。

「あのねえ・・・・・アイツとはそんな関係じゃないってば」

真つ赤になりながら、蘭は両手を顔の前で2、3度振った。

「それに私のことはいいの、京極さんとはどうなってるのよ。冬季大会のときに誘つたんじゃないの?このパーティ」

「・・・・・」

その言葉に、園子の言葉がみるみるうちに壘つていく。

「・・・・・園子?」

親友のただ事ならぬ様子に、蘭は訝しげに彼女の顔を覗き込んだ。

「ええ、そのつもりだつたんだけど。何か次の大会の準備で忙しそうだつたから、誘えなかつた・・・。まだ私たち、恋人同士でもないし。あまり無理に言えなくて・・・。それにほら、彼、クリスマスみたいな外国行事、苦手そうでしょ?完璧な日本男児っぽいイメージじやない。だから余計に・・・ね。断られるのも惨めだから・・・」

「・・・・・園子」

「だから・・・・・イブくらいは素敵な夜を楽しみたいな、と思つて気合入れてこんな格好してきたんだけどさ・・・。空回りだつたみたい・・・。私、疲れたから、もう寝よっかな・・・」

かつたるそうに大きく伸びをする。そして、思い出したように目を大きく見開くと、一人の方に視線を送つた。

「ああ、蘭。そのナマガキつれて、私の部屋来なさいよ。いいビデオがあるんだ・・・・・めっちゃくちゃラブロマンス▽▽」

園子は空笑いをしながら、座つていた席を立ち、エントランスに続く扉に向かおうとしたそのとき・・・。

ガチャ・・・・・キイイ・・・・

突然、彼女が向かおうとしていたその扉が重く音を立てて開かれ

る。

そして、そこに現れたのは  
鈴木園子にとつてのたつた一人の白馬の王子様だった。

そう、彼の名は

「真・・・さん」

園子は、目の前の出来事が信じられず、周りから見れば半ば放心状態で立ち尽くしていた。瞬きするのも忘れるくらい、彼を凝視したままその視線を離すことができなかつたのだ。それくらい、驚いて声もでなかつた。 そう、そこにいるのは京極真。彼女が待ちわびていたはずの男だつた。

「何、やつてるのよ、何で・・・ここにいるの？」

あまりの驚きに涙も出ず、ただ、ぽかんという表情で彼を見つめている。未だに信じられないのだ。

今日だつて何度もかけた電話も繋がらなかつたのに、どこにいるのかさえわからなかつたのに。まさかこんな間近にいるなんて。

「園子さん、クリスマス、おめでとうございます！」

何十人の警備員を振り切つて、園子の前に現れた京極真はどこの童話に出てくる王子様のようで、とてもキラキラ輝いていた。ただ一つ難癖をつけるとするならば、彼の身に付けていた服このパーティでどう見ても場違いな空手着 ただそれだけだったのだけれど、この服装で警備員をぴりぴりさせているのを彼はわかつていないのでどうか。それでも彼はあくまで真面目で、息せき切らして園子だけを見ていた。

その真っ黒い真摯な瞳で彼女だけを、見つめていた。

「・・・・・」

「園子」

ぽんやり彼を見つめていた園子は、蘭にポンッと背中を押されるとはつと我に返る。

振り返れば優しい表情で親友は送り出していた。小さく頷くと、園子は2、3歩彼の方へ歩み寄り、声にならない声で尋ねた。

「真さん。どうして、どうしてあなたがここに？？」

恐る恐るたどたどしく聞く園子の様子に、真は優しい笑みを向けてテノールの甘くて低い声でこう言つた。

「このまえ冬季大会を優勝した後に、あなたに電話してその聲を聞いたとたん、あなたの姿を一目見たくなりまして。本当はこの年末、春季に向けてさつそく練習を始めようとしたんですけども、あなたの顔が頭にちらついてそれどころじゃなくなりまして、気がつけば飛行機のチケットを取つていたのです。情けないことです。もつと精神を鍛え直さないと・・・」

苦笑いを浮かべ、真は鞄のずれを直すために左肩に触りながら言った。少し頬が赤いのは気のせいではないだろう。

「真さん・・・」

目頭からじわーっと熱いものが込み上げてきて、それはつうつと彼女の頬を伝つてぽとり、ぽとりと会場の柔らかい絨毯を湿らせる。それから慌てて指先で涙を拭ぐが、それは止むことはなく、彼女の半月型の大きな瞳から次から次へと流れ落ちていく。園子はそれを隠すようにさつと俯いた。

「そ、園子さん・・・？」

そんな彼女に、真はおろおろとした表情で園子の顔を覗き込み、助けを求めるように、蘭の方を振り返つた。どうしていいかわからぬという様子で。

「大丈夫ですよ。彼女、うれし泣きですから

少し距離をおいて2人の後ろで見ていた蘭は、笑顔でそう言つた。

「うれし泣き・・・？」

目を丸くする真に向けて、蘭は大きく頷いた。

「あなたが今日この会場に来るのをずっと待つてたんですよ、園子。だから今日ぐらいいは甘えさせてあげてください」

「園子さんが、僕のことを・・・？」

蘭の言葉を聞き、驚いて目の前の茶髪の彼女を見つめた。園子はハンカチで涙を拭いて、彼を見上げと、小さくこくりと頷く。

「24日の夜は、あなたと過ごしたかったの。クリスマスのよくな外国の行事、あなたは嫌いかもしない。ううん、それともクリスマスの存在自体、あなたは知らないそぶり。だから諦めてた。あのとき、あなた表彰式だとかですぐに電話切っちゃったし・・・」

園子の言葉に、真は穏やかな表情で首を横に振る。

「確かに僕はこちらに来るまでクリスマスとはどういうものかはつきりいって、りませんでしたし、実際どこの誰かともわからない人の誕生を世界中で祝うこの催しあまり好きではありません。僕はキリスト教信者でもなんでもありませんし。ただ、あつち外国にいると、この時期が近づいてくれば必然的にクリスマスの話が多くなる。そして話は家族や恋人の話で盛り上がり、僕は貴方を意識せずにはいられなくなる・・・だから誤解しないでください」

彼はそこまで言って、優しい笑みを浮かべ、園子に笑いかけた。

「僕はクリスマスだからあなたに会いに来たわけではないんです。ただ、貴方に会いたかったから・・・それが重なつただけなんです」

「ありがとう」「うう」

園子は再びあふれ出そうになる涙を必死で堪えながら、最高の笑顔を作つて、彼に感謝の言葉を述べたのだった。 やっぱり、彼が好きだった。

## 2 (後書き)

あらすじにも書きましたが、24巻あたりの、京極さんと園子たち  
んが付き合っていない時代でお願いします。

「ところであなたどうして空手着なんか・・・。まさか飛行機に乗ってる間も、ずっとそれだつたわけ???

ようやく彼女は落ち着いたところで、先ほどから気にかけていたけれど聞けなかつたことを訪ねた。まあ、クリスマスのイベントが好きではない、と先ほど公言した彼がタキシードなどのドレスコードを着てくるとは考えにくいが、それにしてもこの格好は普段着にもなりはしない。だから警備員だつて余計に彼に対してもびりびりしているのだ。真は彼女の質問に、困つたように額を搔いた。

「はあ。ここにくるまで、まさか今日こんな盛大なパーティが行われていることも知りませんで。しかしせっかくここまできたんですけど、あなたの姿を一目見る前に帰るわけにはいきませんでした。だからいろいろ悩んだ挙句、僕の正装はこれしかない、って思いまして」

確かにそうかもしれない。

冬季大会の優勝を果たしたばかりのこの空手着が今の彼にとつて、最高の正装なのかもしれない。それは、綺麗に洗濯されていたようで、汗の匂いもしないし、糊付けされたようにぱりっとされていて、少しも不潔なイメージが感じさせなかつた。

「あなたらしいわね・・・」

園子は口元に笑みを浮かべてそう言った。そんな彼女を見つめ、突然何かを思い出したように彼は茶色のかばんから、黒光りした小さいケースのような箱を大切そうに取り出した。

「なあに?」

「これ・・・あなたに差し上げます」

「え?」

園子はきょとんとして彼を見上げた。クリスマスプレゼントといふことなのだろうか。さつき、クリスマスは好きではないといつ

たのに。園子はどきどきしながらそれを受け取った。

「・・・開けて、いい？」

「ええ、もちろんです」

園子はきっと指輪であると想つていた。期待に胸を膨らませてその箱を開ける。そして、開けた瞬間、思わず目を丸くした。

「金、メダル・・・？」

思いもよらぬものが入っていたと思つた。指輪だと思っていたから。でも、ガツカリする氣持ちは微塵も起こらず。だって、これは彼が勝ち取つた証だから。

「ねえ、これって」

「ええ。これは僕が留学して、世界と戦つて勝ち得た初めての金メダルです」

「そ、そんな大切なもの、もらえないわよ」

園子は彼の言葉に、あわててメダルを彼の前につき返そうとする。しかし、真は穏やかな表情で首を横にふる。

「これは貴方に持つてもらうべきものなのです。なぜならこれは僕一人で勝ち得たものではないですから」

「・・・どういうこと？」

園子は意味がわからない、という顔をする。

「今回戦つた相手はどれも強者ばかりでした。やはり世界は強かつた。しかし僕は勝つ自身があつたんです。なぜなら、僕にはいつも貴方がいたから。いつでも僕の傍に」

彼は胸元から大切そうに、メモを取り出した。女の子らしい、いくらか丸みを帯びた字で書かれているメモ。そこには電話番号が書かれている。それは彼女が手紙とは別に、携帯電話を持つていなければ、彼がいつでもその電話を掛けてくれるようにと、小さなメモに書いて送つたのだ。しかしそれが最初とちょっと違うのは、なんかしわしわで・・・。

「まさか・・・それ・・・」

園子は思わず口にした。そう、このメモには彼の汗が十分染み込

んでいるようだつた。

「ずっと、持つていてくれてたの・・・」

「ええ。これをずっと練習中、試合中、食事中、寝るときも・・・。園子さんがいつでも見てくれていい、と思つととても力が湧きました。だからあなたに迷惑かけずに済みました」

満面の笑みで言う真。そして自分より20センチほど小さい彼女を愛しそうに見下ろす。

「バツカじやないの」

「え・・・?」

愛しい女性の思わぬ言葉に、一瞬彼の表情は固まる。園子の肩は怒りと悲しみで震えていた。

「バカよ、大バカ！あなたは勝手よー！アタシはずっと待つてたのに。いつあなたの電話がくるかわからないケータイをずっと・・・。そんなんで満足しないでよー！迷惑なのはそうやって一人で解決しようとしちゃうこと！あなたの本当の力になれないことー！」

そう叫び、ポカポカと真の胸板を叩き、泣きじゃくる。そんな園子の様子に、真はオロオロするばかりで。

「そんな・・・何を馬鹿なことを言つているんですか。いつでもあなたは僕の力に」

「なつてない。なつてないよ。真さん。そんな写真や紙切れだけじゃ通じないんだよ。アタシの愛のパワーはそんなもんじゃないんだから。」

「え・・・『愛』ですか」

ぱつと真の頬が桃色に染まる。真の胸板に頭を預けたまま、彼の顔を見るにともせず、言葉にならない言葉で必死にその言葉を羅列した。

「お願い。お願いだから約束して。あなたが寂しくなつたら電話して。こつやつて、逢いに来て・・・。あなたが寂しいと思うときは、私も寂しいんだから・・・」

顔を上げ、真を見上げる。震える手が彼の袖を弱弱しく掴んだ。

「はい・・・

真は力をこめて大きく頷いた。そして、彼女の手をそっと取る。彼の大きな手は、園子にとつととても熱く感じられた。

いつのまにか、見つめ合つ瞳と瞳。

真の熱い瞳と園子の潤んだ瞳が絡み合つように結ばれて

彼女はある言葉を彼に伝えることを決意した。もう自分の気持ちを半分以上は伝えているようなものだけ。でも鈍感な彼はこの気持ちが本気モードだということを気づいていないのかもしれない。だからこそ、今伝えるべきだと思った。意を決して園子はピンクの唇をゆっくりと動かして声に出した。

「ねえ、真さん・・・あのね、一つ聞いてほしいことがあるの」「ああ・・・僕もあなたに言っておかなければいけないことがあります・・・」

頬を赤く染めて、彼が彼女の瞳を見つめる。

(まさか、彼の言っておかなければならぬことって・・・)

その表情から言つて、嫌な展開には行かないだろう、むしろ園子の期待が必然的に高まる。

どきん どきん どきん・・・

心音が大きく高く、綺麗な音を奏でた。

「な、なあに? 真さん・・・先に言つて」

「・・・園子さんこそ、どうぞ・・・」

「でも・・・おねがい・・・聞きたいの」

園子がとろんとした目つきで彼を見上げる・・・。気持ちは既に

陶酔しきっていた。

「・・・で、では・・・」

真は頬を赤らめてコホン、と一つ咳払いをした。それから・・・

「園子、さん」

「はい・・・」

瞳をキラキラにさせて、園子は彼の表情を一秒でも逃さないようしつかりと見つめていた。

「その赤い服、スカートが短すぎではありますか?」

「・・・は・・・?」

目を点にして、園子は彼をまじまじと見つめた。

「その胸元も・・・。肌を透けるよつたなその巻物も・・・」

「巻物・・・」

ショールのことと言つているのだろう。

「それに化粧も・・・。今日のあなたはどうしてここまで派手な格好をしているのですか?こんな姿で外を出歩かれたら何人もの男が群がるに決まっています。今だつて、この会場内に貴方を狙う男がどれだけいるか・・・」

真は警戒した目つきできょろきょろとあたりを見渡す。園子は、彼のその説教じみた言葉を聞いたとたん、へなへなとその場にへたり込んでしまつた。今までの雰囲気を全てぶち壊しにするようなこのセリフ。気が遠くなるような眩暈を感じ、再びテーブルに突つ伏す。

「サイシック・・・」

「そ、園子さん!大丈夫ですか。しつかりしてください!」

真はあわてて園子の肩に手をかけた。しかし、彼女は半泣き状態で、彼のその手を強く振りはらうと、

「なによ!あなたは乙女心なんて少しもわかつてくれないんだからー空手バカ一直線にでも何でもなればいいのよ。空手と結婚すればいいんだわ!」

と叫んだ。そしてそのむしゃくしやする気持ちを「まかすかのよう

に、園子はすぐ田の前にあつた、白くピンクがかつた液体の入つた

高級そうなグラスを手にし、ぐぐぐいと喉に一気に流し込んだ。

グラスの方まで並々入つていたその透明なジュースは見る見る

うちに、彼女の喉の奥へと消えていく。

「アヘ・・・・」

そして次の瞬間、彼女は奇妙な言葉を口から吐き出すと、ぐりりと

彼女の体が傾き、真の胸板にしなだれかかつた。みるとみるうちに赤

面する真の顔。園子の大胆な行動に、どうしていいかわからない様

子だ。

「そ、園子さん。・・・そんな・・・」

そのとき、体をかすこちにする彼の横でコナンがそのグラスの匂

いをくんくんと嗅ぐと、苦笑いして言った。

「・・・」れ、お酒だよ

「えつ・・・・?」

その言葉に驚いて、自分の腕の中の彼女を見る。寝ている。

「真しちゃんの・・・ばか」

既に夢の中に陥っているようだが、彼女の田頭には新しい涙が一

粒ぽろりと落ちた。彼女の口元からは微かにお酒のつんとする香り

がする。真は思わず苦笑すると、

「まつたく、困つたお嬢様だ」

と咳き、そつとその太い指先で涙を拭いてやる。そして彼女を軽々

と肩で抱き上げてゆつくり出口に向かい、歩き出す。

彼のその足取りは重々、しんどさなどは一切感じられず、それどころか園子を抱いで運ぶことを心から楽しみ、また喜んでいるよう

に思えた。

「園子お嬢様をどうする気だ！」

案の定、たくさんの警備員がものすごい剣幕で真を取り囲むが、

彼は少しも動じず、穏やかな表情を浮かべたまま、こう言った。

「園子さんを寝室までお連れするんです、だれか彼女の部屋を案

内をお願いしたいのですが・・・

相変わらず丁寧な口調だ。しかしあたりを見回しても、案の定誰も手を上げるものはいない。それどころか何十人もの全ての警備員が銃を構え、彼を狙っている。彼は思わず、

「こまつたな・・・」

と思案気に口の中で呟いた。

そんな中、遠くの方からすっと細い手が上がるのが見えた。

「京極さん・・・。じつちです」

という、彼にとつても聞き覚えのある女性の声。

真はその声を聞いたとたん、ほつと安堵の息をついた。彼を囲む多くの警備員を搔きわけて、彼の前に姿を現したのは他でもない、園子の大親友である毛利蘭 その人だった。

蘭は彼を案内しながらずっと彼に抱がれている親友の姿を嬉しそうに、しかしどこか寂しそうに見ていた。彼女の幸せそうな表情を見つめながら、蘭は自分と幼馴染の姿を夢見ていたのかもしれない。その隣で、自分のことを心配そうに見上げている一人の少年がいることを微塵も気づかぬまま

話は戻つてあれから2時間経つた  
毛利邸3階 毛利蘭の部屋。

蘭はまだぼんやり外を眺めていた。外はクリスマス・イブのため  
に空を着飾つたようにいつにもまして星たちが煌いている。いつも  
なら絶対感動するはずのこの眺めも、今の蘭には響かない。それだ  
け今の彼女は感傷的になっていた。

「結局新一、来なかつたな・・・。京極さんみたいに、なんとか  
時間ギリギリでも来てくれること、期待してたんだけどな・・・」  
蘭はそう何気なく呟きながら、もうすっかり黒くなつた空を寂し  
げな表情で見上げた。

上を見上げたとたん、急に目頭が熱くなつて　自分の意図に反  
して、それは頬を伝つて、ぽろりぽろりと流れ出した。水晶のよう  
なとても綺麗な涙。

「やだな、泣くつもりはなかつたのに・・・」

くしゃりと泣きながら思わず笑むと、蘭は急いで涙を袖で拭き、  
再び窓に目をやつた。そしてそこで彼女はどんなものかを理解  
する。

そこにいたのは

田の前一直線先に見えるのは、黒い闇の中を白い物体が飛んでい  
る姿。

しかもじつに向かつて

それは彼女の田から、白い鳥のよつとも飛行機のよつとも見えた。

そしてそれを追いかける何台ものパトカーのサイレンの音。

「なんなの・・・?」

蘭は思わず手を「じ」と擦つてから、もう一度確かめた。やはりそれは確実に存在した。あわてて机の引出しおからオペラグラスを取り出すと、その姿をもう一度探す。

いた。

それは低飛行で、信号機のちょうど上べらこを飛んでいて

「!?

鳥でも飛行機でもない。

白い、ハンググライダー。

そしてそれに乗る人物は白いマントとシルクハット、白いスース。白一色に身を染めた片眼鏡の青年。

そう、まるでそれは・・・。

「キッド・・・。怪盗・・・。キッド・・・。アーヴィング

蘭は心地よい鼓動を押さえながら、口の中で呟いた。

## 5 (福井)

いのちの闘争を生き抜いたのが『死闘』  
初めてと二つとだ。

漆黒の闇に優雅に飛び交うその白い飛行物体。そしてそれを操るのは一人の白き天才奇術師そう、彼の名は。

「怪盗キッド」・・・

蘭はオペラグラスを手に、信じられない、と呟いた。

オペラグラスを持つその手が、そして体を支えるその膝が、たたがくがくと震えている。まだ心臓がどきどきする。しかしそれは確実にこっちに向かってきて。

50メートル、40メートル、30メートル

オペラグラスの中に映る彼の表情は口元に笑みを浮かべていた。片眼鏡をつけているので正確にはわからないが、どこか胸がざわざわ騒ぐのは気のせいだらうか。あの表情、だれかに似ている。

「!?」

オペラグラスが彼の顔で完全に埋まつとき、蘭は思わずそれを手放した。音を立てて床に落ちるオペラグラス。がしゃん、と派手にガラスが割れた音が耳につく。しかし、それでも彼女は彼から目を離すことはできなかつた。そう、その表情は彼女が待ちわびていた人物とよく似ていて。

「嘘……」

蘭は呟いた。やはり彼は新一とそっくりだった。蘭が長年待ちわびていた幼馴染であり、ほんの数ヶ月前まであらゆるメディアを騒がせていた高校生探偵、工藤新一と。

あのとき、鈴木財閥での船上パーティーで怪盗キッドは彼女自身、そう、毛利蘭の姿に化けた。その全ての出来事は彼女にとって、一瞬のことであつた気がしていた。しかし蘭とキッドが入れ替わるその瞬間に、蘭は薄れ行く意識の中で、懐かしい声を聞いたような気がした。

彼の顔もぼんやりと見えていたような気がした。そしてそのときも・・・キッドのその声は、その顔は、自分の愛しい愛しい幼馴染である工藤新一のものにそっくりだった。だから不安だった。新一がキッドだったら、という不安でいっぱいだった。

だが、その不安はすぐに消えうせた。

なぜなら次の日、道中であるカッフルを見かけたからだ。

その事件の3週間前に渋谷で見かけたカッフルである。3週間前、雨の降る渋谷ですれ違いざまに見たあの青年。あのときは新一と信じて疑わなかつたが、事件の次の日に再び彼を見かけて、蘭は工藤新一とは別人だと確信した。よくよく見れば頭の形、目つき、喋り方。少しづつ違っていた。

その瞬間に、蘭はすべての不安が一気になくなつていくを感じていた。もしかしたら、自分が彼の姿を追うことに躍起になつただけなのかもしれない。きっと落ち着いてみればあのキッドも別人に見える。

新一はキッドじやない、泥棒なんかじやない。そう思つたのに。

今、目の前に映るキッドは、やつぱり新一にそつくりだった。これは偶然なのだろうか、ただの他人の空似なのだろうか。それとも一度逢つて話がしたかった。

+++

屋上に上がると、蘭はあわてて四方を見渡す。

いた。すぐ目の前に。

彼は蘭が突然屋上から現れたのを見ると、さすがにぎょっとした表情をしてみせた。しかしその表情も一瞬だけで、すぐにいつもの彼の穏やかな表情に戻る。

これがポーカーフェイスというもののなのかもしれない。蘭は、はあはあと息を切らせて彼だけを睨んでいた。

「・・・またお会いしましたね、お嬢さん」

彼は上品な笑顔でそういうと、彼女がいる屋上へと降り立つた。白いハンググライダ　はいつのまにか彼の背中にコンパクトに収められていて。

近くで見ると、ますます新一にそつくりだった。

その白い肌も、声も、口調も、微笑みも何もかも。

遠くからはパトカーが数台、こっちへ向かってやってくるのが見

えた。

蘭はそれを確認すると、彼の瞳を悲しそうに見つめた。

「追われてるのね・・・」

「まあ・・・確かにそういう状況かもしれませんね

しかしそう言いつつも、彼が放つその言葉には、少しも切迫感が感じられない。むしろどこか楽しそうだった。

「ところで貴女の方こそどうされたのですか？その表情はどうか憂いを帯びているようだ。せっかくの美しさが曇りガラスのようにくすんでしまいますよ」

キッドはそういうと、くすりと口元に笑みを浮かべた。気障な言い回し。仕事をするときの、しかも女性を前にしたときの新一に似ている。

油断してはいけない、蘭は本能的にそう思った。

本人にしても、別人にしても、相手は世界に名高い怪盗キッド。後にも先にも今がチャンスだ。今すぐにでも片眼鏡の向こうの素顔が見たかった

だから、

彼女は強行的な手段をとった。それは

蘭はすうううと腹の底から大きく息を吸って、

「アアアアアアアツ！！」

と氣合を入れながら、ひゅうと風を切る鋭い音と共にその細く長い足を彼に向けて高く鋭く振り上げた。もちろん、狙いは彼の片眼鏡。

「・・・つ！？」

彼はあわてて身を大きく捻った。

間一髪。

そしてそれは彼の前髪を掠る。ぱらぱらと落ちる前髪の先・・・。さすがにこの展開にはキッドも動搖したのか青い顔で、

「ま、マジ？」

「こう、気障な彼らしくない言葉を口里とこぼした。

蘭は空手の構えをしたまま、彼を挑むような視線で見つめていた。じりっと彼が一步後ろに下がる。明らかに今の状況だけ取つたならば、彼女が上である。

「さあ、今度こそあなたのそのモノクルを剥がしてみせるわよ」

蘭は勝ち誇ったように彼の顔のど真ん中に指を指した。

その瞬間、・・・ふつ、とキッドが小さく笑つた。もう既に、彼特有のいつものポーカーフェイスに戻つてしまつている。その意味深な笑みに、今度は蘭がたじろぐ番だった。

### 形勢逆転、か。

「おやめなさい、お嬢さん。その清楚な白い下着が丸見えですよ」

そんな冷やかすような彼の言葉に蘭はかああつと赤くなつてスカートを両手で押された。あまりの羞恥心で顔を上げられない。

「・・・それに、残念ですが貴女に私は捕まえられない」

下を向いたまま、聞こえたのは目の前にいるキッドの自信ありげな言葉。蘭はその言葉に思わず顔を上げ、彼をきつとした表情で睨んだ。

「思つてないわ、そんなこと」

「え・・・？」

「あなたを捕まえようだなんて思つてない。私はあなたの正体が知りたいの。ただ、それだけ。あなたを警察に突き出すつもりなんて、そんな考え最初から全然ないんだから」

蘭は挑むように、一步、前に進む。

そう、私はあなたが誰か知りたいだけ。

あなたは一体、誰なの？

「・・・なるほど、そういうことですか」

しばらぐまじまじと、探るように蘭の瞳を見ていたが、キッドは突然、全てを悟ったかのよう、くっくつと可笑しそうに笑った。

「どうやら、貴女はある名探偵と私を同一人物ではないか、と疑つてゐるわけですね」

「・・・『名探偵』？」

思わず聞き返す。緊張で、ぐくん、ぐくんと胸の鼓動が高鳴つていいく。

「そうです。貴女の探ししている『高校生探偵 工藤新一』彼でしょう？日本警察の救世主、平成のホームズ、東の名探偵などといくつもの誉れ高い肩書きを持つ、彼のことと言つていいのでしょうか？」

動搖して、蘭は思わず後ろへ一步後ずさつた。

「何で・・・」

「ああ、だからといって私が工藤新一だと認めたわけじゃありませんよ。私はただの泥棒ですから。そして彼は探偵だ。それは確かなことです」

彼はそう言つて意味ありげに笑つた。

「私は完璧主義者なんでね。例の漆黒の星の事件で、貴女に姿を借りる前に少しばかりあなたに関係する情報を調べさせてもらいました。彼と貴女、切つても切れない存在のようですね」

彼が胸ポケットから何枚か写真を取り出して、扇状に広げた。

1枚目は、帝丹高校の制服を着た蘭と新一が肩を並べて歩いている様子。

彼女の手には数学の問題集。眉間に皺を寄せて考えていて、彼はそれを横からアドバイスを与えていた。・・・という写真。

2枚目はノンのとある廃ビル。

手すりが腐つていて、階段から外へ投げ出された銀髪の通り魔の手を、蘭と新一が2人でしつかり捕まえている写真。

3枚目はトロピカルランド。

ミステリー・コースターというアトラクションで乗り物待ちをしているときの写真。見ず知らずの女性の手をぎゅっと握つて、彼女の素性を明かした新一に、蘭を始め、周りの人たちが驚いている、という光景。これはきっと、彼が消える数時間前のことだろう。

そして4枚目は、奇妙なことに新一は登場しない。その代わり、メガネをかけた少年 江戸川コナンと手をつないで夜道を帰るシーン。

おそらく、このシーンは蘭が彼に新一への思いを告げた場面だろう。

5枚目は彼が行方不明になつたあと、突然姿を現した時の写真。西の名探偵である服部平次と初めて出会つたときのことだ。蘭が心配する田の前で、階段から落ち、姿を消す瞬間。しゅうしゅうと彼の体から出ている湯気まで鮮明に、その写真には写つている。

#### 6枚目は帝丹高校文化祭の翌日の話。

眠そうに大あぐびをしながら、食べかけのトーストを手に、奥の部屋に消えていく彼の姿。そしてそれを嬉しそうに、玄関の扉の隙間から見つめている蘭の姿

#### そして7枚目は

彼女が7枚目に視線を移そつとしたそのとき、それは次々と普通のトランプに変わっていく。

「お願ひ・・・待つて!!!」

蘭は大声で叫んだが時は既に遅し。彼の手中でそれらの写真は次々と赤い格子模様の入つたトランプに変わってしまっていた。

「生憎ですが、それはできません。なぜならこれは、タネも仕掛けもないただのトランプですから」

「ふざけないで！」

蘭は思わず声を荒げた。

そんな彼女にキッドは思わずくすりと微笑んで、いいえ、と言つた。

「確かにこれはただのトランプですよ、お嬢さん。なぜならもうこれは『薬』の効き目が切れてしまったようですから。効き目がなくなればもう普通のものと何ら変わりません」

「薬……？」

「ええ。あなたたちの過去を知る上での大切な情報を持つた薬」  
彼は胸のポケットから小瓶を取りだし、蘭の前で軽く振ってみせた。透き通った、薄い紫をした液体が入っている。ちょうど紫キャベツで色水を作ったときのような色。

「……あなたは何を知ってるの……？」

そんな彼を見つめ、蘭はおそるおそる尋ねた。キッドはその質問に一瞬、小首をかしげる。それから小さな間を開けた後、そうですね、と呟いた。

「……私は、何も知りませんよ。知っているのは、これを作った本人。この漆黒の夜空を自由自在に飛び交う一人の魔女　彼女ぐらいではないでしょうか」

「ま……じょ」

蘭は思わず目を間開いて、彼が言ったその言葉だけを繰り返した。それだけ彼の言葉は強い威力を発していた。彼女の脳裏には、長い黒髪の似合う美女が、月の綺麗な空をほつきに跨り自由自在に飛んでいる、そんな光景が見えていた。そして彼女にぴたりと寄り添うのは、白いハンググライダ　に乗った白い怪盗。

魔女と奇術師……。一体どんな組み合わせなのだろう。  
果たして彼の言つことは真実なのか、偽りなのか。それはわからなかつた。

しかし気を抜いたら彼がいつ自分の下から飛びたとするか知れないのだ。

蘭は呼吸をするのを忘れるほど、緊張した面持ちで彼を真正面から見据えていた。

一步でも動いたらまた飛び掛るつもりでいた。

キッドはそんな彼女の強い視線を受け止めながら、ちらりと屋上から町並みを見下ろした。それから、突然明るい口調で、おや、と呟く。その言葉につけられ、蘭がその方向に目をやるとそこには赤く点滅するランプを上に掲げる白と黒の車がいくつも列を連ねてこっちに向かってやってくるのが見えた。 そう、彼を追う警視庁のパトカーはすぐ傍まで迫っていた。それは米花町4丁目を抜け、目指すは毛利探偵事務所のある5丁目に指しかかるうとしている。このままでは彼を捕らえるのも時間の問題かもしれない。

「一体、彼はどうするつもりだというのだろう。

彼女の心配、不安、緊張をよそに、キッドはそれでも楽しげに、下界（？）の様子を眺めていた。そして白い吐息とともに、この言葉を吐いた。

「やれやれ、相変わらず騒がしい人たちだ。今宵は誰にとつても特別な日であるというのに・・・」

その言葉を終えるや否や、キッドは握り締めていた手をぱっと開く。

ボンツ

何かが弾けたような音。

すると突然その手から彼そつくりのダミー人形が現れ

「任せたぜ、ダミーちゃん」

彼がそう呟くと、それを合図に、まるで自分の意志があるかのように、ダミー少しだけコンパクトなハングライダーに乗り、東の空に向かって飛んでいく

そしてそれを追いかけてパトカーも彼らのもとから遠ざかっていく。

やかましかった街がみるみるうちに静かになり、蘭はあっけにとられたような表情でその一部始終をただ黙つて見ていた。

その間、何も言葉が出せなかつた。それだけ田の前に起ひつた事は彼女にとつて衝撃的で……。

キッドは全てのパートカーがいなくなるのを確認して、よひやくふう、と小さなため息をついた。

蘭はじつとその背中を見つめていた。見つめられずにはいられないからつた。

その視線に気づいたのか、キッドはゆっくりじりじりに向けて振り返る。口元に穏やかな微笑を浮かべて。そしてそのまま、蘭の顔を見つめてこう言った。

「・・・これでまたようやく厳かで静かな夜が訪れました。さてお嬢さん、他に何かお知りになりたいことでも?」

毛利探偵事務所屋上。

毛利蘭と怪盗キッドはそこでお互の顔をじっと見つめたまま、一步も動こうとはしなかった。否、実際は蘭の方は動けなかつただけなのかもしない。彼は微笑を浮かべていた。そして、彼女は彼を睨んでいた。

彼は言った。

「・・・これでまたようやく厳かで静かな夜が再訪されました。さてお嬢さん、他に何かお知りになりたいことでも？」

「・・・お嬢さん？」  
もう一度、キッドの口がそう発音した後で、蘭ははつと我に返った。

そして本来自分が彼に対して聞きたいことが山程ある」とを思い出した。

そう、蘭は彼が言った言葉で少しも満足してはいなかつた。なぜなら彼が新一でない、という証拠さえ一つも立証されてはいなかつたから。あの写真は、ただの『記録』に過ぎなかつたから

幼なじみで高校生探偵である新一と自分が高校に入つてから過ごした2年間の記録。

新一とキッドが別人であることを肯定する証拠はどこにもない。それどころか、何かで気を逸らせてみせて、やうやく自分を口先だけで「まかそうとするところも新一とそつくりでますます彼に対する疑惑が強まつた。

しかし何故か彼女の口はその一つを口にすることができなかつた。まるで誰かがその言葉を禁じる魔法をかけているかのよつた。

「・・・ならば、私は去りましょ」

キッドは蘭が何も言わないのを確かめると、さつと漆黒の空に拳を掲げた。それから握っていた手をゆっくりと開ける。その瞬間、目の前に広がるのは光の海・・・。

「眩し・・・！」

それが世に言う閃光弾だと気が付いたのは、蘭がその光を体いつぱいに浴びてからだつた。近くにキッドがいるはずなのに、どうしてもその姿を目にすることができなくなつていた。

「あなたのような美しきレディに少々手荒なまねをしているのは重々承知です。ですが、しばしご容赦ください。なぜなら私は誰にも正体を知られてはいけないので。それが例え自分の大切な人であつても・・・。その時が来るまでは、絶対に」

「その時？」

「ええ。『その時』です」

閃光弾のせいで目が眩み、何も見えない。

しかしキッドの彼が自分から離れていく空気の動きだけは感じ取られた。

行つちやう・・・！

思わず蘭は田を片手で覆つたまま、もう片方の手を宙に伸ばしていた。

「待つて！…行かないで…」

先ほど彼が使った閃光弾の眩しさのせいで前が少しも見えない。それでもキッドを捕まえたくて、蘭は必死に手をかき回していた。気がつけば彼のマントの裾をぎゅっと掴んでいた。

「・・・・・アラ？？」

キッドが思わず呟いたマヌケな声が、蘭の耳に伝わった。蘭はゆっくりと田を覆つていた片方の手を外してみた。少しずつ、少しずつ田が慣れ、境界もない、ただ白一色だった景色がだんだん輪郭を帯びてくるのがわかつた。そして キッドは彼女の斜め前にいた。

そして彼女にいきなり裾を捕まれ、明らかに体勢を崩し、後ろに大きく反り返つている。

「…？」

キッドはあわてて手すりにつかり体勢を立て直そうとしていた。が、そのマントを掴むその手を蘭が離さないので、結局はそのままの姿勢に留まつた。

かなり情けないその姿。

例えて言うならば金の鯱しゃちほこ。

キッドは無理やり力を込めて、マントを掴むその手を振り払おうとしたが、空手を嗜む蘭の腕力は半端じやないらしく、振り払うことはできなかつた。

「・・・お、お嬢さん・・・その手を・・・」

キッドの声はかなり上ずつている。その瞬間、蘭は勝ち誇った表情で田の前の泥棒を見下ろした。今では彼女の視力は通常に戻っていた。

「『お嬢さん』なんて呼ばないでよー私、毛利蘭つていつ立派な名前があるんだからっ！」

「その手を離してくださいませんか・・・」

「だめ、あなたが新一じゃないつてわかるまで絶対離すもんですか！」

蘭はマントを握り締めたままキッドの顔を見据えていた。

しかしどこか悲壮感が感じられたその表情。決して離してなるものか、彼女の表情は、それほど強い感情を露にしていた。キッドはそこで小さくため息をついた。

「その手を・・・離しなさい」

「嫌よ」

「・・・『蘭』や・・・！」

キッドは初めて彼女の名前を呼んだ。

「・・・・・・

じきんつ

一瞬、蘭の大きく黒い瞳が陽炎のようにゆらゆらと泳いだ。

そしてその瞬間、キッドの白いマントを掴んでいた彼女の手の全ての力が抜けた。白いマントはするすると自分の意思で彼女から離れるように離れていく・・・。

全ての力が抜けたように、蘭はへなへなとその場にしゃがみこん

だ。

瞼の裏に見えるのは、ただ一人の青年。自分だけを見つめる青年。

『蘭』

彼の声が聞こえる。

優しい眼差しで自分を見つめている。

いつも自分を守ってくれた、包んでくれたその眼差しで。

そして今、瞼に写るその幼馴染と、白い衣装で身を固めた目の前の青年とが彼女の中でシンクロする。

新一、キッド、新一、キッド、新一、キッド、新一、新一、新一。  
・・・

「いや！」

蘭は思わず目を覆り、ガタガタと震えながら小さく叫んだ。

「蘭・・・さん？」

戸惑ったようにキッドは蘭を見つめたが、すぐに状況を飲み込んだのか、次の瞬間にはいつものポーカーフェイスに戻っていた。そして白いマントをひらりと翻し、そのまま優しく彼女の体を包み込む。

「・・・蘭さん、落ち着いて・・・」

その声はまどろんだ春のぬくもりのように優しく、穏やかだつた。マントに、蘭の体の大半はすっぽり包まれていた。・・・いつの間にか彼に抱きすくめられていた。自然に。紳士的に。

「深呼吸です。大きく息を吸って、吐いて・・・」

彼が耳元でささやき、大きく呼吸を始める。それに倣い、蘭は深呼吸を試みた。乱れていた呼吸のリズムも、6回を過ぎたころには彼とほぼ同じリズムになっていた。

それでもしばらく深呼吸は続けていた。

「ずいぶん落ち着いたようですね」

そのあと一〇回ほど過ぎた後で、彼はふと深呼吸を止め、彼女を抱きしめる手の力を緩めた。

「ありがとう・・・」

冷たいコンクリートを見つめたままの視線。

「どうされました?」

キッドは優しく紳士的な瞳を、目の前の彼女に投げかける。蘭は目線を少しだけ上げた。

「・・・ねえ、キッド。あなたが新一じゃないのなら、どうして私に優しくするの?」

何で、あんなに優しく私を抱きしめてくれたの?

私を大切そこに、抱きしめてくれたの?

あなたは気障な奇術師だから?

他の女の子にも同じことをしてるの?

私が哀れな少女に見えただけなの?

・・それとも、あなたはやつぱり・・・。

蘭はまた少し目線を上げた。

彼の白い顎が見えた。

あなたはやつぱり新一なの?

蘭は思い切って目の前にあるキッドの顔を見上げた。彼は少し考えているように、眉に皺を寄せ、目を瞑り指先で顎をなぞっていた。やつぱり似ている、と思った。そうして再び彼の素顔が知りたくなった。

白い肌、透き通るような肌。そして片眼を隠した片眼鏡。

手を伸ばせばすぐにそれは外せる距離にあった。こくり、と唾を

呑み込む。そしてそつと手を宙に浮かせたそのとき、キッドはようやく決意した、とでも言つてゆつくりと瞑つていた両手を開け、その言葉を口にした。

「泣いて欲しくないんですよ、あなたに」

驚いて彼を凝視し、出しかけた手を慌てて引っ込んだ。

「彼のために、泣いて欲しくないんですよ」

彼は先ほどと一つも表情を変えずに、その言葉をもう一度言つた。

「どういうこと？」

彼はそこで蘭を抱きしめていた手を解くと、立ち上がりつて隅の方にカツカツと靴音を立てて歩いていく。

「ねえ、キッド！」

蘭は我慢できずにその大きな背中に向かつて叫んだ。それに反応するよつて、ぴたりと止まる足音。その緊張感に、蘭は思わず口をきゅっと結び直した。キッドはぐるっと振り返り、蘭と体を向き直してゆっくり口元を緩ませた。

「そうですね・・・。いろいろ理由はありますが、一番は彼が・・・

・工藤新一が私と似ているからでしょ？」

「そんなのわかつてゐるわ。そつくりよ」

蘭が怒ったような拗ねたような表情で抗議する。そんな彼女の様子に、キッドは思わず苦笑した。

「顔のことを言つてるんじゃないんです。探偵と怪盗・・・私たちは一見両極端にいるように見えて実は同じ場所に向かつていたんです。昔も、そして今も」

「同じ場所・・・」

「そう。そしてそこまで辿り着けずに、私はまだ怪盗を続け、そして彼は・・・」

「そこまで言つて、彼は一度言葉をやめた。そして思い直したように口の筋肉の動きを元に戻す。

「工藤新一は、あなたの元から行方を晦ましている」

彼は蘭に背中を向け、再び隅の方へゆづくじ歩き出した。コシロ

シと靴底の音がして。その背中に、蘭はおしゃるおしゃる尋ねる。

「……やめたいの？あなたは怪盗を」

「……」

彼は珍しく何も答えずに、歩きつけた。蘭は大声で彼の背中に言葉を浴びせつける。

「だつたらやめればいいじゃない。殺人もしないんだし、宝石だつて多くは返しているんでしょう？それにあなたがいいことだつていっぱいしてること、私知ってるよ？今からでも遅くないよ。ね？」

キッド

「

その言葉は心から心配していた。

キッドはそんな彼女の心遣いに思わず口元を綻ばせ、ゆっくりと振り返った。

「お気遣いありがとうございます。でも……。言つたでしょ？それが。『その時』が来るまで、つて。今は『その時』ではない。・・まだ、パーツが足りないんですね」

「パーツ・・・」

蘭は口の中で彼の言つた言葉を繰り返した。そしてゆっくり尋ねる。

「新一も・・・同じなの？」

「・・・ええ。だから戻つて来れない。だから余計にもがいてる・・・。少しでも早く、あなたの元に帰ろうと必死に頑張つている・・・。そんな彼の状況も考えずに泣くのは、彼にとつて酷だと思いませんか」

「・・・つまりあなたは、少しひらに我慢しなさい、と言つてるのね」

蘭はくすりと笑つて、月のバックに照らされた彼の優しい表情を見つめていた。

いつのまにか田の前の怪盗が新一ではないことが前提で『こと』が進んでいた。気が付かぬうちに、蘭はおそらく田の前の彼は、

自分の探している新一ではないことを理解した。

渋谷ですれ違つたあの青年みたいに、また自分の行き過ぎた感情から來た人違い。

さつきはあんなに目の前の彼が新一じゃないかつて信じ込んでいた自分が今では滑稽にさえ思えた。

確かに彼の得意としているその気障なセリフは、仕事モードのそれに似ていた。

背格好だつて大体同じ。時折見せるその優しさも・・・。

しかし今、この白い罪人が話した言葉がすべて絵空事とは思えなかつた。それだけ彼の瞳は澄んでいたから。嘘を言つてはいたくなかったから。

きつと彼は彼で苦しんでいるのだ。そして、新一も・・・。

「これでも我慢してたんだけどなあ・・・」

蘭は溢れ出しそうな涙を堪えて、空を仰いだ。涙が一滴も目尻からこぼれないように。

「そうだよね。新一、頑張つてるんだもんね、こんなところで負けられないよね・・・笑つて待つてあげなきゃ、いけないよね・・・」

「・・・蘭さん・・・」

キッドが切なそうな顔をして彼女を見つめ、そうしてその頬に手を伸ばしたそのとき。

「蘭姉ちゃん！」

蘭とキッドはほぼ同時に振り返つた。

そこにはメガネをかけたあの少年が、新一の小さいころの生きしのよいうあの少年が、息をはあはあ切らせて立つていた。

そう、その少年の名は、江戸川コナン。  
新一の好きな探偵ものの名前を持った少年だった。

「蘭姉ちゃん、どいて！」

そこにいるのは、蘭の家に居候している弟みたいな少年。江戸川コナン。まだ小学生になつたばかりだつていうのに。

遠くからまるでピストルで相手を打つそんな仕草をして、腕時計のようなものを彼に向けている。それはとても鋭い視線で。そしてその視線はいつも彼じやなかつた。まるでそれは。

そこまで思いかけて、蘭はふつと苦笑した。

(私、新一病にかかつてる。だれでも彼でも、新一に見えてくる。疲れてるのかな)

そう思つてしまつ。

「つたぐ。待たせやがつて」

自分のすぐ横でその声を聞き、蘭ははつと我に返ると、おずおずとキッズを見上げた。  
「どいてつたら！」

コナンを見つめるその顔は嬉しそうに笑つていた。  
「コナンの語調を強めた声に、はつとして蘭はキッズから離れた。それから2人から遠く離れた場所に行き、心配そうに2人の様子を伺い見た。

これから目の前の少年が何をしようとしているのかわからなかつた。それでも蘭は2人の間にただならぬ何かがあることは感じることはできていた。

+++

月が綺麗な夜だった。  
オレンジ色の月が煌々と闇夜を照らしている。そんな月の下で二人は向き合っていた。

探偵と、怪盗。

「よお、名探偵。・・・遅かつたじゃねえか。来ねえかと思ったぞ」

キッドはちびりっと、闇を照らす時計台に手をやった。0時まで、あと25分。

それから彼は、「ナンの構えているそれに手を遣つて、「そんな飛び道具、あのお嬢さんの前で使ってもいいのか?」とおどけたように言った。

「オメー、蘭に何すつかわかんねーからな」

キッドは目の前のコナンが言ったその言葉を聞き、思わず鼻でせせら笑う。その表情は明らかに皮肉めいていた。コナンはむつして彼を睨んだ。

「・・・何だよ」

「女性にとつて年に一度の大事な日、クリスマスイブ。そんな夜に遅くまで、彼女を一人にさせておいた『男』が何をいうかと思つてな」

その言葉の意味に、はつとするコナンの顔は明らかに先ほどまでのそれとは異なっていた。コナンは思わず声を潜めた。

「・・・オメー、一体何を知つてる?」

「あ・・・ね」

意味ありげにキッドは笑つた。その様子にコナンはこよこよ顔を

青ぐする。

「ま、まさか蘭に何か変なこと吹き込んだりしたんじゃねーだろ  
うな・・・ー?」

動搖するコナンを前に、彼は涼しい顔でいつ言った。

「ああ、どうだろうな。それでも、何が起こったとしても。子ど  
ものフリに慣れて本来の自分として彼女に接するのを怠つたおまえ  
への罰だと思つた方がいい」

「なんだと!?

コナンは思わず声を張り上げた。その瞬間、彼はにやりと笑つて  
腰元から一瞬の速さで銃を取り出すと、彼に向け、発射した。

催涙弾だ。

霧状の催涙剤はあるで煙のよつにあたりにたちこめていく。  
彼はあわてて目を庇つたが、既に遅く、それは彼の目を強く刺激し  
た。

「それじゃあな、名探偵。・・・また逢あつ」

バツ

ハングライダーを開く大きな音が耳元で聞こえた。背中につけて  
いたそれが再び開く音。

「畜生っ・・・! 待てっ! 卑怯だぞっ」

コナンは再び何とか目を開け、じほじほと咳き込みながら腕時計  
型麻酔銃を構えたが、目が痛いわ、涙がぽろぽろ出るわで、撃つこ  
とすらできなかつた。

そんな彼を見透かしたように、高らかに笑うその声が耳についた。  
相変わらず自分の声にそつくりなその声で笑われると、余計に気持  
ちがむしゃくしゃしてくる。

そんな気持ちも相成つて、耳元でハンググライダが飛び立つ音  
が聞きながら、何もできない自分に思わずクソッ、とつぶやいた。  
そしてようやくその効き目が切れたときには、ハンググライダに

乗ったキッドは既に遙か彼方に消えていたのである。

「コナンくん！？」

パタパタと音を立てて駆けてくる足跡に、彼ははっと、縮こめた  
いた姿勢を正した。もちろん蘭だ。

「何、どうしたの？何があつたの？怪我はない？どうして泣いて  
るの、ねえコナンくん！？」

さつとハンカチを取り出して、コナンの頬や目尻を拭いてやる。

「僕は大丈夫だよ。それより蘭姉ちゃんは？」

全然大丈夫そうではないのに、それでも笑顔を作る彼に対しで、  
蘭は思わず苦笑して、「コツン」と指先でコナンの額を押し上げた。

「何が僕は大丈夫、よ。大丈夫なわけないじゃない。・・・こんなになっちゃって。キッドと何話したの？」

「・・・別に。どうしてこんな場所に降りたか、蘭ねーちゃんと  
何話してたか聞いただけだよ。そしたら・・・」

（子供相手に催涙弾なんて放ちやがつて。今度会つたらただじや  
すまねーぞ）

もちろん効き目は薄い簡単なものを寄越した様子ではあるけれど、  
それでも未だ目が痛い。目をパチパチと何度も瞬かせさせながら答  
えるコナンに対して、蘭は心底心配そうに眉を顰めた。

「もー。キッドつたらコナンくんに一体何したのよあ・・・」

「僕は大丈夫だつて。それより蘭ねーちゃんは？」

慌ててコナンは蘭の顔を見上げた。

「キッドに何もされてない？大丈夫だつたの！？」

自分がとある場所の帰り道。毛利探偵事務所の屋上に降り立つキ  
ッドの姿を見つけ、慌てて駆け上ると、そこにはキッドだけではなく  
蘭の姿があつて。とっても近くに彼女はいて、今にも泣き出しそ  
うな、そんな顔をしていたから。そしてそれを愛おしいような表情  
で彼が見つめるから。

そんな二人に、彼は、嫉妬した。

「蘭ねーちゃん、アイツに何言われたの？」

「え？・・・別にたいしたことじやないよ。コナンくんは心配しないでいいの」

「でも・・・」

「そ・れ・よ・り」

尚も食い下がるコナンに対し、自分を労わり、ずっとハの字だった蘭の眉が、急に逆ハの字に変わる。

「コナンくんこそ何してたの？今までビリビリ行つてたの？すーと姿が見えなかつたわけだけど？」

語調も強くなり、自分を鋭く見据えるその視線に、コナンは思わず縮み上がつた。

「え・・・どうして・・・。パーティ終わつた後、ずっとおうちにいたじゃない。蘭姉ちゃん、お部屋にこもつつきつだつたから気づかなかつたんだよ」

顔が青ざめ、さつとも自分の言葉が少し早口になつていて、彼は感じていた。

「嘘つかないで。じゃあ何で洋服着てるのよ？私、コナンくんがお風呂入つていたの知つてるのよ？何でパジャマじゃないの？それに何でせつそんなんに息を切らしてたのよ」

「いい、嫌だなあ、蘭ねーちゃん。勘ぐりすぎだよ。息せき切らせてたのは階段を上つてきたからじゃないか」

「ふーん。じゃあパジャマは？」

「だから、ほらっ。さ、サンタさんを待つてたんだ。パジャマじゃないとサンタさんに失礼かなと思つて・・・」

我ながら小学1年らしい、純粋無垢な返答をした、とコナンは内心ほくそえんだ。しかし・・・。

「ふーん・・・サンタさん」

コナンはますます顔を青くした。今でも怖い顔をしていたというのに、彼女の顔は更に般若の表情<sup>それ</sup>に変化していた。ほきほき・・・

と指を鳴らしている。

「蘭姉ちゃん、怖ひ・・・」

コナンは引きつった笑顔でそう呟いた。その瞬間蘭は腕を思いつき彼に伸ばした。間一髪。ひょい、と逃げるコナン。

「待ちなさい、この不良少年！私はあなたをそんな子に育てたつもり、ないんだから！」

「「めんなさーいつーーー！」

コナンは逃げる。

蘭は追う。

また逃げる。

また追う。

そのまま繰り返し。

毛利探偵事務所の屋上で行われたそのいたじりつけは、しばらく続いていたのである。

その様子を、毛利探偵事務所から少し離れたビルの屋上で双眼鏡を手にし、胡坐をかいて見ている男が一人。先ほどのキッドである。さつきより明るくなつた蘭の表情に、彼は嬉しそうに口元を緩ませて

「あらあら、随分ご満悦ですこと」

皮肉じみた語調を含むその声にキッドは思わず振り返つた。いるはずのない人物がそこに、いた。

月の光を受けて。

時刻は深夜11時35分を過ぎていた。

誰もいなくなつたとあるビルの屋上。  
そこにいるのはキッドただ1人　だつたはずだったのだが。

「あらあら、随分」と満悦のこと

皮肉じみた語調を含むその声にキッドは思わず振り返つた。いるはずのない、人物がそこにいた。口許に美麗な笑みを浮かべて。紅子だ。しかしつものキッドの姿で逢うときのその衣装ではなかつた。淡いグリーンのニットのワンピースに、厚地の青いロングコートを羽織つてゐる、普段着。頭にも手にも首にもじゅらじゅらとした不気味な装飾品もないし、杖もない。それはどこにでもいる普通の女の子といった感じだつた。そう、キッドと向き合つときの魔女ではない、江古田高校に通つ女子高生　　小泉紅子がそこにいた。

驚いて後ずさる。こんな私服姿で逢うとは思わなかつたし、何ヶ月か一緒にすゞした中で、そんな格好をするとは思つてもいなかつたのだ。

「オメー、ぢりしてこんなとこに・・・

動搖し、ついにいつもの様子でこいつ喋つてしまつ。そんな自分に気づき、あわてて口を押された。そして、

「こんなところにこつまでもいらしては風邪をひかれますよ、お嬢さん」

と口調を変えて、いつものキッズの顔をつくる。彼女はただ黙つてキッズを見んでいた。

「どうされたんです、お嬢さん」

キッズはそれでもたじろぎもせずに紳士的な笑みを見せた。そこで彼女はようやく、きつくへの字に結んでいた口の端をゆるゆると開いていく。視線は一ミリたりとも変えることなく、ただキッズを鋭く睨みつけながら、強く、はつきりとした口調でこいつ言った。

「・・・私は正々堂々、小泉紅子としてやつてきましたの。あなたも元のあなたに戻られたらいかがかしら?」

一時たりとも離さないその凜とした視線に、その瞳に、魔力が込められていると言つたらきっと誰もが信じるだらう。それほどまでに彼女の瞳は紅く輝いていた。そして艶美な色がこめられていた。・・しかし。

「元の私、とは?」

キッズはくすりと笑つて言つた。そんな彼の様子に、鼻持ちにならない、という顔で紅子は溜息をつき、まあこの際どうでもいいわ、と呟いた。そしてまたキッとした強い表情で彼を見据える。

「あなた、どうこいつもりですか?どこ馬の骨とも知らないあんな小娘に鼻の下伸ばして。自分の好みのパンツを持つている子なら、誰でもいっておっしゃるつもり?ならば私とて今すぐこの顔を変えましょう。それであなたが私だけの虜になつてくれるというのでしたら。魔法であなたを苦しめるだけ苦しめて結果を出せずに

いるより、一番手っ取り早い方法ですもの

「何のことです・・・？」

キッドはわざと、何をいつているのかわからない、という表情で小首をかしげた。その様子にますます紅子は顔を赤くする。

「・・・『黒羽くん』！」

イライラとした表情で、そしてヒステリックに紅子はその名を呼んだ。キッドは、だれですか、その人は、と言いかけて口を噤んだ。紅子がその言葉を言わせないというように、鋭い視線で自分を睨んでいたからだ。今にも泣き出しそうな顔をして。

「あ、紅子？ オメー・・・」

思わずつぶらえてしまつ。

泣いたら確か魔法が使えなくなるんじゃなかつたか

「大丈夫。心配無用」

紅子はそう言つてぎりつと下唇をかみ、拳をきゅっと握り締める。そんな彼女の健気な様子に、彼はようやく諦めたように大きくため息をつく。

そしてジャケットの胸ポケットを2、3度撫でると、白いマントを翻した。次の瞬間にはシルクハットも片眼鏡も白のスーツも消え、代わりに普段のパークーにジーパン姿の青年が現れる。

そこには、江戸田高校2年B組、黒羽快斗。

にやり、と片頬だけ吊り上げて、彼は田の前の女子高生に向けて笑つた。

そんな彼を見つめて、呆れたよじ、「どこか物悲しそうに少女は小さく一つだけ溜息をついたのだった。

「これでいいんだろ、紅子」「仕事着から『本来の姿』に戻った彼が、にやりと笑つて彼女に聞いた。

「・・・」

紅子はその言葉には答へず、ただ、ふいっと彼から顔を向ける。

「おい・・・」

キッドもとい快斗は思わずげんなりとする。

「何を怒つているんだよ」

「別に。キューバの最大のエメラルド『祈りの女神』を盗むためにクリスマスパーティー抜け出して・・・。その後はすぐ帰つてくると思つきや、こんなところで道草食つてるなんて。貴方のしていることに幻滅した、ただそれだけのことですわ」

「・・・はあ？」

頭に?マークを浮かべた、そんな表情で彼は紅子の顔を見ていた。自分が何故そんなに彼女を怒らせているのかがわからなかつたのだ。そんな表情を見て、更に彼女の苛々に拍車がかかる。言葉にも勢いがついていた。

「あの後の中森さん、寂しそうでしたわよ。寄り道しないで帰れば十分帰りまでに間に合えましたのに。まったくあなたがあのような少女に現を抜かしてはいたから」

非難するような紅子の口調ぶり。

今日の紅子はいつになくイライラしているようだつた。そして突如こうつ快斗に詰め寄つた。

「わつきの質問のことたえ。まさかＹＥＳじゃないんでしょ?」

「・・・?」

「あなたは中森さんだから好きなんでしょう?例え私が中森さんの顔と私の顔を魔法で取り替えたとしても、あなたはまた中森さん

を選ぶんでしょう?」

真剣な紅子の顔。

「・・・けつ。だ、誰があんなアホ子を」「快斗は一度はそのことばを口にしてみたが、真剣に自分を見つめる紅子を見てから、思い直してこいつ言った。

「・・・確信なんてねえけどな。おまえと違つてあいつ、相当アホだから。おまえの顔になつて、ぱにくつてわんわん泣いているあいつを放つとくわけにはいかねえだろ」

そのとたん、紅子はくすくすと笑つた。

今日初めて彼に見せた笑顔。

かわいい。

快斗は一瞬どきり、とした。

「黒羽くんらしい」回答じやない」

「・・・逆にオマーはらしくないことばっかり言つてるけどな」

快斗は思わず反射的にそう答えた。

「え?」

きょとんとした顔で紅子は快斗を見つめる。

「いつも青子のことを敵対視しているおまえが、今日はあいつの肩ばかり持つじゃねえか。あいつが今のおまえの言葉聞いたら、絶対喜ぶと思うな」

快斗の言葉にみるみるうちに紅子の顔が動搖の色に染まり、少しの間うつむいた。そして再び顔を上げたときはいつもの彼女の何に対しても自身ありげな表情に戻つていた。

「・・・それは、これ以上あなたのライバルを増やしたくないからですわ。もちろん、あなたのハートを最後に射止めるのはこの私ですけれどね。・・・今見てなさい。・・・あなたが私の虜になるのはもうすぐですわ、フフフ」

いつもの調子で高らかに笑う彼女。けれど快斗は、今日紅子が青子の肩ばかり持っていた理由がそれだけではないことはわかつた。だから思わずくすり、と口元を綻ばせる。

「紅子」

「・・・・つ！！」

思わず紅子は顔を彼から背けた。

が・・・目のために黄色のカーネーションを差し出され、彼女は強制的にそれを見ないわけにはいかなくなつていた。

「・・・あ、あら、何ですか？・・・黄色のカーネーションだなんて。・・・真紅の薔薇ならわかりますけれど・・・そんなもの、私には

彼は何も言わずにそれを天高く放り投げる。

「！？」

そして次の瞬間、天高く上がった黄色のカーネーションは、黄色のマフラーへと変わつていた。紅子は目を大きく開き、ふわりふわりと落ちていくマフラーを見て、いるしかなかつた。快斗はそれを彼女の目の前で掴み取ると、そつとその細い首に優しく巻いてやる。

「・・・やるよ、オメーに。クリスマスプレゼント

「え・・・？」

「鼻の頭が赤いぜ？まるで童謡に出てくる『赤鼻のトナカイ』みたいだ。せつかぐの美人が台無しだぜ」

彼のからかうようなその言葉に、紅子は嫌ですわ、と言つて顔を赤らめ、すぐに鼻を両手で覆つた。

「・・・こんな寒いところで、ずっと待つてくれてたんだな・・・

。ありがとな

快斗はいつになく優しい表情を彼女に向ける。

「そんな。私はあなたが私以外の女に優しくするのが許せなかつただけですわ。」

紅子はあわてて弁解するが、既に彼は彼女の目の前にいなかつた。いつのまにか、屋上の真中に立ちすくみ、漆黒の空を見上げている。

そしてポケットから何か無線のよくなものを取り出し、それを弄り始める。

「何・・・」

「どの道、ジイちゃんにヘリコプターで迎えを頼んでたんだよ。まさかあの子に逢うとは思わなかつたから・・・。頼んだのは40分も前だし、きっとこの近くの空、うろむけりしてるんじやねーのか」

彼はそう言つて無線機でなにやらぶつぶつ相手の見えない誰かと話し始める。きっとその相手が彼の言ひ、ジイちゃんなのだひつ。紅子は動搖して声を荒げた。

「そんな・・・。こんな時間にこんなところで、あのヘリコプターを近づける気? それこそあなた本当に警察に!」

そんな彼女の様子に、快斗はくつくつと笑つ。思わずムツとして紅子は快斗の耳を引っ張つた。

「いてつ・・・いててて」

「何が可笑しいんですの? 黒羽君! 私は本当にあなたのことを心配して」

「悪い。・・・でも、大丈夫だよ、紅子。ジイちゃん、ああ見て何でもできるんだぜ。親父がキッドとして名をはせたときも、ジイちゃんは付いてたんだ。もし、信頼のおける若い誰かが今ここに100人現れたとして、仲間を一人選べと言われたって、俺はやっぱりジイちゃんを選ぶよ」

快斗はふつと笑つて空を見上げた。そして、ほら来た、と口の中で呴いた。微かにぱぱぱ・・・とヘリコプターの音が聞こえてきた。しかしそれはうるさいというほどではない。

それほどヘリコプターは上空に飛行していた。豆粒大というの大げさだらうがそれに近い距離から、するすると縄梯子が降りてくる。

「・・・おめーはどうする?」

彼は振り返つてこう言った。

「やめておくきますわ。・・・はじ」が切れたり、解けたりした

らそれこわ洒落にならないし、それに警察に見つかったら面倒じゃない。いくらなんでも、こんな街中で人間がヘリコプターに引き上げられているのを見たら騒ぐのは当然ですもの。キッドの姿ならまだしも、あなたは今、ただの高校生の姿なんですからね

「紅子の言葉に快斗は思わず失笑する。  
「・・・確かに。だから・・・」

彼はいつのまにか白のシルクハットとマントを手にしていた。そしてマントを翻し、自分の全身を隠すようにする。

「3、2、1」

と呟くと、彼はまたキッドの姿に戻った。

「・・・では、『きげんよう。お嬢さん』

紅子は彼のスイッチを入れ替えるようなその、言葉遣いの切り替えに思わず苦笑する。

「それでは・・・すばらしきクリスマスを」

彼はそう言つて、紅子の手の甲に軽くキッスをした。

「あつ」

とろん、とする紅子の顔。

キッドはそんな彼女を見て、優しく微笑むと、縄梯子に手をかけた。するするとそれは速いスピードで引き上がられていく。

そのとき、町中から再びざわざわ沸き始めた。どうやらキッドがいることに町にいる誰かが気づいたらしい。

『キッド、キッド、キッド、キッド、キッド、キッド・・・』

やまないキッドコール。

もうすぐ深夜12時だといつのに、町はどこに人が居たのかといふくらい賑わっていた。

紅子は騒がしいBGMを背に、ため息をついて彼の姿を追つた。

ヘリコプターに辿り着いたキッドは、群衆に向かつて大きく手を振つて見せた。そして一度紅子の方を向いたと思うと、軽くウインクをする。相変わらずのハンターティナーだ。紅子はそんな彼をぼんやり見つめていた。

キッドは紅子が何も反応を示さないのに気づくと、思わず苦笑して再び群衆に向かつて大きく手を上げて見せてから、ヘリコプターの中に消えた。

そうやつて、ヘリコプターはゆっくり江戸田町に向かつて飛んでいく。

「ホント、・・・能天氣な男」

紅子は彼がヘリコプターの中から見えなくなるまで見届けていたが、最後にポツリと呟いた。そして大きくため息を吐くと、自分は非常階段を下りていく。カンカンカンと音をたてて。

ビルは7階建て。

暗い足元を照らすのは月明かり一つ。それでも紅子は、今は『小泉紅子』のままでいたかった。

そつとその手を見つめつ。彼にされた手の甲のキス。柔らかな唇の感触が残っていた。

紅子は彼が口づけたその場所に、そつと自分の柔らかな唇を合わせた。そして彼女はふっと口元を綻ばせて、再び階段を下りていった。

月が彼女の顔を美しく照らしていた。  
彼女の顔は、とても優しかった。

時刻はPM11：45を回っていた。

毛利探偵事務所2階、毛利蘭の部屋。

蘭は窓から漆黒の空を見上げて、ふつゝと溜息をつく。どこかで白いハンググライダ を操り、漆黒の空を鳥のように優雅に飛び回る彼の姿を思い浮かべながら。

「ねえ。教えて、キッド。新一のこと、今日はもう待っても無駄なのかな。・・・私はどうすればいいの？ねえ、キッド・・・」しかし、いくらその名を呼んでも、もう彼は蘭の前に現れてくれることはなかつた。聞こえるのは大通りを走る車の音だけ。

蘭は思わず寂しそうに笑つて壁から背を向けた。長い髪をかきあげながら視線を床に落とすと、そこには白い紙飛行機が所在なさげに落ちていた。それはまるで彼が自由自在に操っていたあの白いハンググライダ のようで。

「キッドは逢いたい人に逢えたかな。・・・新一は今・・・何、してるんだろ」「だいに涙が溢れてきた。

少しでも早く、あなたの元に帰ろうと必死に頑張つてゐる・・・。そんな彼の状況も考えずに泣くのは、彼にとつて酷だと思いませんか。

先ほどの彼の声が突然彼女の脳裏に蘇る。

「わかつてるよ、キッド」

蘭は涙声で呟いた。泣いちゃいけない、そんなことわかってるのに、目からこぼれてくるのは出でくるのは、塩辛い水。止め処なく

流れていぐのは、大粒の涙。思わずきゅっと口唇をかみしめた。そのとき

彼女の耳に聞こえてきたのは携帯電話の着信メロディー。蘭はその音にはつとして顔を上げ、それを勢いよく取り上げた。そしてあわてて耳に当てる。

「・・・あ、あの・・・」

「よお、蘭。メリークリスマス、だな」

その声を聞いたとたん、彼女はへなへなとその場にくず折れるようにしてへたり込んだ。

その声の主は、工藤新一、蘭の幼馴染の声。今日こうやって話をすることを、ずっと心待ちにしていた大好きな彼の声。彼の声が、彼女を闇から光にみるみるひびき、引き上げた。

## 1.1(前書き)

まだ蘭ちゃんが新ちゃんに電話を掛けられない状況のところです。

「よお、蘭。メリークリスマス、だな

電話の向こうから囁くように、囁み締めるように吐き出されたるその言葉。その声を聞いたとたん、彼女はへなへなとその場にぐず折れるようにしてへたり込んだ。

その声の主は、工藤新一、蘭の幼馴染の声。今日こいつやって話をすることを、ずっと心待ちにしていた大好きな彼の声。そんな彼の声が、電話口から自分の名前を呼んでいる。

「な、何よ。・・・何よ、今さらつー」

蘭は思わず声を張り上げた。虚勢を張っていた。

「悪いな、蘭。いつも心配かけて」

穏やかな新一の声。それは、いつもと変わらない、優しい声。でも

「バカ・・・」

蘭は鼻をすすりと瞬りながら呟いた。じわじわと涙が瞳の奥から湧き出して止まらなかつた。よつやく彼の声が聞けた嬉しさと、実際にには触れることができない寂しさと。そんな2つの複雑な感情が彼女の内で交錯していた。

「・・・泣いてるのか？」

心配そうに訊ねる電話口の彼の声。思わずムツとして蘭は涙でぐしゃぐしゃだつたその顔をこわばらせた。一体誰のせいだと思つてるので、と。泣いてるわよ、そつおいつとしたとき、彼女は再びキッドが言つたあの言葉を再び思い出した。

少しでも早く、あなたの元に帰ろうと必死に頑張つている・。  
・。

「・・・泣いてなんか、いない・・・わよ」  
蘭は震える喉を必死に押さえながら言った。

「そつか？俺はおまえが鼻たらして、泣いてる姿がこっから見えるんだけどな」

「ばつ！・・・た、たらしてなんかつ・・・」

蘭はあわてて自分の鼻を押さえながら、声を張り上げた。もちろん、たらしてなんかいない。そう、新一の冗談。電話の向こうで、くつくつと可笑しそうに笑う声が聞こえる。

「もうつ」

蘭は思わず怒りのため息をついた。それから短い沈黙が流れた。

「・・・悪かったな。待たせちまつて」

沈んだ新一の声に、蘭は思わず虚勢を張った。

「・・・大丈夫、気にしないで。今日はすごく楽しかったんだから。園子の家のクリスマスパーティー行つて、ビンゴ大会やつて自転車当たつてそれで・・・」

パーティの終わりには京極さんが登場して、酔いつぶれた園子をお姫様抱っこして彼女の部屋まで運んでいった。そのシーンが明瞭に頭に浮かんでくる。

しかし、何故か彼女の口からそのことは言つことができなかつた。親友の幸せを心から喜んでいるはずなのに。何故か、今だけはどうしても口に出すことができなかつた。喉に詰まったようなその溢れる感情が、その声を塞いでいたのかもしれない。

「それで・・・」

蘭はその涙を飲み込んで、続きを言おうとした。しかしそのとき、彼が全てをわかってるというような口調で

「園子、京極さんに逢えたんだろ、よかつたな」と遮つた。

「え？」

思いがけない彼の言葉に、蘭の目は点になる。そんな彼女に、新一は思わず苦笑した。

「『ナン』に聞いたんだよ、電話で。でも・・・『めんな。俺は今回は、京極さんみたいにこっちへ帰れそうになえんだ。今日も、明日も』

「そう」

蘭の声は無意識のうちに沈みきついていた。彼女にとつて、その言葉はかなりショックだった。しかし、それでも表情に出さないよう必死に堪えていた。そう、ここでも、キッドの言葉が影響されていて。

「でもクリスマスプレゼントは・・・」

「いらないよ。私、そんなの」

蘭はすぐさまそう反応した。

それは遠慮なんかじゃない、全然彼女は彼のプレゼントを期待してはいなかつた。蘭が欲しいのは、彼自身だから。新一が前みたいにここへ戻つてくればそれで何にもいらないのに。なのに。

「いいから、オメーに受け取つて欲しいんだ」

どきり。

蘭の胸がまた小さく高鳴つた。彼の強い語調になにかある一種の思いが感じられるようで。最近の新一は昔とはだいぶ違つて見えた。随分優しくなつた氣がする。

「・・・わかった」

蘭は頬が紅くなつていくそんな自分に気がつきながら、小さくこくり、と頷いた。

そのとき。かたん、と部屋の向い側で何か物音がして、蘭ははつとして振り返つた。誰か、いる。

まさか。

「・・・どうした？」

怪訝そうつな彼の声。

「う、ううん・・・何でもない」

蘭はそう言いながら、ある僅かな期待を感じ、そーっと返配を感じさせないようにドアの前まで忍足をする。

「新一・・・あのね

「あん？」

やつぱり。

彼の声はそのままドアの向こうから聞こえる。  
そこに、いる。

蘭は、思い切ってドアノブを回した。

「っ――」

そこにはのは、江戸川コナン。 そつ、彼、ただ一人。  
口元には白いマスク。耳には片方だけのイヤリング。  
彼はぎょっとした顔で蘭の顔を見ていた。

そしてあわててそのマスクとイヤリングを口元から剥ぎ取ると笑  
顔を作った。

「ど、どうしたの、蘭姉ちゃん」

「・・・「ナンくん」

蘭はちよつと拍子抜けした顔になってしまった。そこに間違いない  
彼がいると思つたから。

「新一、知らない？そこにいなかつた？？」

「え？ずつと僕一人だつたけど」

「ナンはぎょとん、とした顔で蘭を見つめる。

「え、だつて確かにそこで・・・」

彼女は、そう言いかけて、そこではたと、言葉を止めた。

何故、こんなにタイミングよく、新一は電話をよじしたのだろう。

何故、この少年は今、ここにいるのだろう。

何故、少年だけしかいないこの場所から、新一の声が聞こえたのだろう。

田の前で自分を見つめるこの少年。そしてこの電話の主である幼馴染の彼。これがもし、同一人物だとしたら……。

そこまで考えて、蘭の手がコナンの頬にするすると伸びていく。そして、

「うめんね、コナンくん  
と呼ぐと……。

「あててててて、な、何するんだよ、蘭姉ちゃん！」

思いつきりコナンの頬をぎゅーっと抓つたのである。

いや、掴んだ、捻つた、引っ張つた、と言つたほうが、言葉とすれば適切かもしれない。頬の皮を顔から剥ぎ取りでもするかのようだ。

「イテテテ！ もうやめてよ！」

コナンはあまりの痛さに思わず目に涙が浮かんでいる。蘭はその言葉に、ようやく彼の頬を捻つていた手を外し、申し訳なさそうに言つた。

「うめんね。あなたのこと、キッドかもしけない、って思ったの。キッド、変装するのも声を変えるのも得意でしょ？だから、もしかしたらあの後、実は帰つたんじゃないくて、コナンくんの姿になつてこの家に忍び込んでたのかもしけない、と思つて」

「いくら何でもキッドは子供には変装できないよ。それに何で僕になる必要があるの。それだったらキッドが、新一兄ちゃんの姿に最初からなつてればいいじゃない」

コナンは思わずひりひりと痛む頬を撫でながら抗議する。

「だつて……だつてさ」

蘭は小さく、そして少し困ったような微笑をして、田の前の少年の紅くなつた頬を優しく触れた。

彼なら。

自分の心をここまで浮上させてくれた彼は、最後の仕上げにこんなサプライズを用意してくれてもおかしくなかつた。本物としては来られなくても、変装して自分の心を癒すことはきっと彼にとっては容易い御用だと思つたから。

「でも、違つたんだね」

電話をくれたのは、キッドではなく、ホンモノの『彼』だつた。時間はギリギリだつたけれど、イブも彼の声が聴けて。忙しい忙しいといつも言つている彼が自分に電話をかけてくれたその事実。

「よかつた」

ポツリ、と蘭は自然とその言葉を零した。キッドじやなくて。ホンモノの『新一』の声で。もしもこれがキッドであつたならば、しばらく自分はきっとキッドの優しさに溺れてしまつところだった。彼に魅了されてしまつところだった。

それが一夜限りの彼からの『クリスマスプレゼント』だつたとしても。

ふと、余韻に浸つっていたそのとき、「あつー」と小さく声を上げて、蘭は携帯電話を見返した。案の定、既に彼からの電話は途切れ

ていて、単調な通信音しか聞こえることはなく。

「もひつー。」

どうしてこういつもまく行かないんだろう。もひと彼の声を聴いていたかったのに。

自分の妙な詮索で、少しの時間もなくなつて。自分のせいで、神様がくれたチャンスを放棄してしまつた。

まだ、満足できない。できるわけない。

だからといって、自分からは電話ができない。何も行動が起こせない。スキだという気持ちも伝えられない。

自分は新一の手の平の中で転がされているだけなのだろうか。そんなわけない。だけど、アクションを起こせるのはいつも新一のほうで。一方通行で

「ズルイよ・・・

電話を切つたのは自分の所為だけど。でも、新一に恨み言を吐きたくなる。吐いたつていいじゃないか。新一が電話番号を教えてくれないので悪いんだから。

鼻の奥がつんとしてくる。目が染みて、今何か喋つたら、哀しみが言葉とともに溢れ出やうじ。ぎゅっと下唇を噛み締めた。しだいに喉の奥から込み上げてくる感情。このままでは涙が湧き上がってきて。どうやらキッズの効き目も同じものようだ。思わず目頭を押え、蘭は俯いた。

「蘭姉ちゃん、大丈夫?」

心配そうに自分を見つめるその少年の澄んだ瞳。彼女は目の前で彼がゆらゆらと陽炎のようにゆれていくのを感じていた。涙で滲んで前が見えなくなる。

どうして目の前の子が新一じゃないんだろう。そんなことを

思つてしまつ。

思つてはいけないと解つてゐるの」。

「蘭姉ちやん」

コナンの手が優しく蘭の腕に触れたとき・・・。

泣いてほしくないんですよ、あなたに。

不意にあの声が、あの言葉が、あの表情が浮かんできた。

蘭は突然夢から覚めたかのようにまつと顔を上げ、なにやら考え込むように真正面に目を向けた。

あのとき、見つめていた彼の蒼い瞳。あれは何を意味してたのか。そのポーカーフェイスの裏に、何を隠していたのか。

彼のために、と付け足してはいたが、きっとあれは自分のためでもあつたのではないか。

彼と自分は境遇が似ている、とキッズは言った。

もしかしたら、新一を待つ自分と同じよつて、彼には・・・。

蘭はそこまで考へて、ふつと苦笑した。そして目頭にたまつた涙の粒を指で拭いきり、

「泣かないよ、キッズ」

と清清しい表情でつぶやいた。

その言葉に、コナンは思わず声を張り上げる。

「・・どうこいつことだよつ、蘭ねーちゃんー? ?

「ううん。何でもないつ」

蘭はそう言つて笑うと、その小さな少年から顔を向けてみせた。

今になつてようやく氣づいた。

こんな特別な夜に逢いたい人に逢えないのは、自分だけじゃないってこと。

新一だって自分と逢いたい気持ちはきっとホンモノ。声を聴いていればわかる。

でも、さつき自分の目の前に降り立つて自分を慰めてくれたあのキッドだって、そして彼の帰りを待つ彼女だって、きっと今の自分とおんなんじ気持ち。

そう、世界中にはきっと、こんな自分たちみたいなカップルが沢山いるから。

思いは繋がっているのに、逢いたくても逢えない状況。自分が寂しい思いをしているんじゃなくて。

空を見上げて、愛しい相手のことを思っている人は沢山いるはずで。

「一人じゃ、ないんだよね」

しづやつて空を見上げるのは。

思い合つていれば、逢いたいと願つていれば、願いは必ず届くから。

願つていよう、信じていよう。

次の聖なる夜には、君と過ごしていられるように。全ての人気が笑顔で迎えられますように。一人の願いが、全ての笑顔に変えられます様に。

空には輝く満天の星。ホワイトクリスマスイブにはならなかつたけれど、明日もきっとならないけれど、でもこんな晴れた寒空には白い星がよく映えて。

「空に輝くイルミネーション、だね」

ポツリ、とコナンが言った言葉に我に返る。

「新一も見てればいいな」

「そうだね、きっと・・・。見てるんじゃないかな」

優しく咳くコナンの横顔に、蘭は静かに微笑んだ。

夜が明けた。

今日は待ちに待つクリスマス。子供たちはいつもよりきっと早起きで、朝一番に枕元に置かれたサンタクロースからのプレゼントを見つけ、喜んでいることだろう。

毛利探偵事務所にて。

早朝、予告通り朝刊より早く、彼女宛に一通の手紙と小包がポストに投函されていた。

もちろん差出人は、白ひげのサンタクロース、ではなくて、幼馴染の工藤新一。そして中身は

「悪かったな。突然切っちまって。昨日はずーっと現場について、電話もできない状況だつたし、それでようやく時間ができたと思つたら、いきなり刑事さんに呼び出されて。それから電話することもまたできなくなっちゃって」

電話の向こうで新一が申し訳なさそうに言った。蘭は彼にもらった星の形にカットされた石が沢山施された首飾りを付け、鏡でその姿を確認する。その表情は満面、輝かしい笑顔に満ちていた。

「ううん。それにしても、よく私がこの首飾り欲しがつてたのわ

かつたわね」

「バーコ。言つたら？俺は探偵だ、って。蘭の考へてることじがらいお見通しなんだよ」

「そつか・・・」

蘭はくすつと笑みを浮かべる。

「・・・そーいや、コナンから聞いたんだけど、昨日オメーキッドと逢つたそうじゃねえか。大丈夫だったのかよ」

突如声を潜めて、彼は心配そうに蘭に尋ねた。そんな彼の様子に、蘭は得意満面、な顔でフフンと笑つた。

「平気よ。逆にキッドのファンになっちゃひったもん、私

「へつ！？ちよ、ビーいう意味だよつ。おまえ一体昨日アイツに何つ・・・」

明らかに新一の声が裏返つている。蘭はくすくす嬉しそうに笑いながら、あることを思い出して、あ、そつだ、と呟いた。

「・・・つ？」

明らかに焦つたのか、動搖したのか、一瞬彼の呼吸が乱れた。

「・・・あのねえ、新一とキッドって似てるのよ？」

「俺とキッドが？・・・何で」

怪訝そうに、あるいは不機嫌そうに彼が聞き返した。

「・・・それは・・・」

蘭は一度言葉を切り、意味深げに口元を綻ばせながら

「内緒よ。キッドと私の秘密」

受話器の向こうで、彼が何度もその秘密を知りたがつたが、蘭は最後まで答えようとはしなかつた。

だって、そう。

『今はその時じゃない』から。

夕方になると、蘭は夕食の支度をするために台所にいた。コナンは今日は博士の家で少年探偵団のメンバーとクリスマスパーティーをするために、既に家にはいない。

ここにいるのは、父である小五郎と自分だけ。

去年と同じで物足りない。ホントはこんな日は母である英理と3人で行きたかったが、結局それも今年も叶いそうにない。

クリスマスなのに、なんだか平凡な、いや、いつもより寂しい一日の始まりだ。

昨日の夜から今日の朝にかけて不思議で幸せな一日があつたというのに。

彼から貰った首飾りをそつと胸元にかけ、一人褒めてくれる相手もないまま。それでも胸元に彼がくれた証を感じてちょっとばかり幸せになつてみたり。

そんなとき、テーブルの上に置きっぱなしにされていたスポーツ雑誌の朝刊に気づき、蘭は何気なくそれを手にした。そして一面を飾る彼の姿にすぐに釘付けになる。

『白き怪盗、またも華麗に宝石をドロンー』『空上に現れた怪盗エンターテイナー、美しき仕事の数々』

一体どっちの味方なんだ、ときつと新一やコナンが見たら怒るに違いないそのタイトルに、蘭は苦笑した。紙面の内容は、今日の朝刊ではまたもキッドが現れ、華麗な奇術を駆使して、杯戸美術館にあるキューバ国家の大宝石を盗んだ、というもの。新聞記事とほぼ同じスペースで、キッドの写真が載せられている。中を開くと、2面、そして社会面にも彼の特集が。相変わらずの人気ぶり。

そんな彼と、昨日あんな風に出会って。抱きしめられて。慰められて。

なんだか今でも夢ではないかと思うほど。

杯戸美術館の屋上から、口元にちょっと小馬鹿にしたような笑みを浮かべて、地上の何十台ものパトカーを見下ろしている写真。その写真を見ながら、蘭は彼女の目の前で自分と等身大の人形を瞬時に出し、バルーンに載せて飛ばした、そんな彼の姿を思い出していた。

「・・・おーい、蘭っ！おまえ宛だつてよー」

彼女の父、毛利小五郎が階下で素つ頓狂な声を上げたのを耳にした。その声にはつと我に返ると、蘭はそれをテーブルの上に戻し、スリッパをパタパタと音を立てながら急ぎ足で台所から顔を出す。

「えつ？」

慌てて階段を降り、リビングを抜け、事務所へと続く廊下のドアを開けたとたん、目にしたものは

深紅のバラの花束。50本くらいあるだろうか。

「お届けものです」

花屋の制服を着たがねをかけた冴えない20そこそこの若い青年がっこりこちらを見て笑っていた。そしてその隣には不機嫌そうな小五郎の顔。

「じゃあ、ここにサインをお願いします」

差出人を確認する暇もなく、彼が差し出した用紙に、言われるがままにサインして、それを受け取っていた。

「ありがとうございます、それでは失礼しましたー」

帽子を取つて深々とお辞儀をして、ドアを閉めようとする。慌てて蘭もそのドアノブに手をかけたとき、

「笑顔が、戻りましたね。・・・お似合いですよ。思つたとおり。田の前の薔薇も霞むようだ」

突然、その声が変わった。

昨日の、あの声。新一にも似たあの声。

うれしそうに、優しく紳士的にその口許が微笑んだ。

「・・・キッ・・・?」「  
ばたん。

完全にドアが閉まる。  
はつと我に返つて、慌ててドアを開けて廊下を見ると、そこには、誰の姿もなかつた。

「・・・おい、どした?」

ぽかん、と閉まつたドアを見つめていた娘に、小五郎は心底怪訝に思ったのか、肘で強く突付いた。それでようやく我に返る。

「つ・・・」

「にしても、なんだかすげーな。ナンだよ、これ。年の数の倍はあるぞ。・・・あの探偵齧りのくそくそ生意気な探偵ボウズからじやねえのか?」

不機嫌そうに彼は呴くと、そのバラ1本1本の数をひい、ふう、みいと数え始めた。そんな父の姿をぼんやりと見ながら、蘭は首を横

に振る。

「多分、違うと思つてよ・・・」

「違うと思つて、おま・・・」

不思議そつに娘を見つめてから、彼はその花束の中から、何かに気づいてそれを抜き出した。そこにあるのは、一枚のカード。

「なんだこりや！」

再び素つ頼狂な声を上げる。そこには丁寧な字でこう書かれている。あの予告状に必ずつゝキッドの可愛らしげに落書きマークも添えて。

『『昨夜の貴女に親愛を』』めで 深夜キッド

『 昨夜の貴女に親愛をこめて 深盜キジド』

言葉に、父である小五郎は心底驚いた。そして信じられない、といつ顔で自分を見つめる。そんな自分自身も、カードに書かれたその名前に「やつぱり」という思ひと、それでもまだ信じきれない思いと、そんな複雑な思いで心を埋め尽くされていた。

花を届けてくれた青年。にせつと微笑んだその口許。あつとまた変装してやってきたのだけだ。

最後の最後に自分に囁いた言葉は忘れられない。彼の声。

アレは、やつぱり夢じやなかつた。

一瞬心がふるむと震えて、それを隠そうと慌てて深呼吸を繰り返して、一つした。

「 昨夜の貴女 」 ・・・ だあ？ おい、蘭。 わかえこいつどビウコツ・

今だ信じられない表情で、小五郎は素つ頓狂な声のまま、蘭を見つめた。

「 まさか探偵の娘と怪盗がデキてた、だなんてそんなことはないよなあ、おー・・・。そーなつたら俺は・・・ 」

青くなつた顔で小五郎はまるで夢であつてくれといつぱりに頭を、何度も何度も横にがくがくと振つた。

「ちよつ、お父さん、違うよ。それはきっと勘違いで……」

「そーだ、あの探偵ボウズはどうするんだ、あいつはっ……

・・・え？勘違い？」

きょとん、として小五郎は娘の言葉に言葉を止めた。

「それは何かの間違いよ、きっと。だつて私、キッドが隣町の杯戸美術館に盗みに入つたとき、まだ園子のパーティ会場にいたんだよ？どこでどうやって彼と会えるっていうのよ」

「あ、ああ。でも・・・仕事のあと、深夜1・2時近くに、米花町のどつかの建物の屋上で、キッドは誰かと会話しているところを目撃されているんだ。長い黒髪が綺麗な高校生か大学生くらいの女子と」

ぎくり。

蘭の顔が青ざめる。その表情の変化に小五郎も思わず顔を青くする。

「蘭、おまえ・・・まさか」

「ひ、人違ひよつ。人違ひ。これも、もしかしたら園子がふざけて送つてきたかもしれないしつ」

「・・まあ、あの子ならこんなことするかもしねえが・・・」  
小五郎はぶつぶつ呴きながらそれでも不信そうに尚もその花束と娘を見比べている。蘭はそんな父親を見ながら大きくため息をついた。それから、彼には見えないように小さくそつと微笑んだ。

ひらひらとバラの花束の中から落ちていくカード。蘭はそれを手にとると、それをじっくりと眺めた。印刷された黒字の太ゴシック体で書いた簡素な文字。

それでも十分彼女は嬉しかった。そしてそれを大切そうにエプロ

ンのポケットにじまつと、彼女はわざと窓から見える西の空を見上げた。

昨日、キッドがいなかつたら、自分はどうなつていただろ。新一を罵り、泣き喚き、醜態をさらしていたかもしれない。彼を困らせていたかもしれない。

しかしそれをしなかつたのは、キッドが傍にいてくれたから。自分が慰めてくれたから。彼の本音を自分に聞かてくれたから。

「感謝してるよ、キッド」

蘭は未だ目線を窓に向ひ、はるかかなたの空に向けたまま、ポンリと呟いた。

茜色の空が、とても綺麗だった。

まるで彼女の今の心を映しているかのよつてその空はとても澄み切つていた。

蘭はしばらくその空を見上げていたが、ふと自分の部屋にあの白い紙飛行機が落ちたままだったことを思い出し、早足でその場を後にした。

早く、白い紙飛行機をこの綺麗な空に飛ばせてみたかった。

それはきっと、遠く、遠く遙か彼方まで飛んでいくような気がしていた。

昨日あの漆黒の空から突如現れ、また消えていった心優しき一人の奇術師が乗っていた、あの白いハンググライダ のよつ。

どこまでも、遠く、遙か彼方まで。



### 13（後書き）

とつあえず、これで本筋は終わります。

あとは、オマケ。「ナンくんと袁けやん編です。  
別に一人がテキてるって話じゃなく、この話の裏設定。  
コナンくんが一体蘭ちゃんがキッドと会つてたときにどうして行つて  
たか。そのことをちょっとね。それではまだまだおまけまでよろしく  
お願ひします。

キッドが毛利蘭と毛利探偵事務所屋上で接觸しているそれよりほんの少し前、江戸川コナンは阿笠邸の前にいた。彼は少し焦つているように見えた。しきりに時計を気にしている。

時刻は深夜11時を20分ほど過ぎていた。

背伸びして自分何とかそのチャイムを押すと、すぐに玄関のドアは開いた。ほっと表情を緩ませる。ドアが開いたその瞬間から甘いお菓子の匂いが彼の鼻孔に進入していく。

この匂いはクッキーだろうか。

「あら、早かつたのね・・・」

頭にバンダナをつけ、濃い水色のHプロンをした哀がサンダルを履きながら顔を出す。

「おう、まあな。・・・それより何だよ、この甘い匂いとその格好。今からお菓子教室でも開くつもりかよ」

「ナンは小鼻をひくつかせると、改めて哀の着ているものを上から下までぐるりと見回した。そんな彼の姿に眉を寄せた。

「バカね。明日の準備じゃない。まさかあなた、明日、ここでクリスマスパーティーすること忘れたなんて言うつもりじゃないでしょうね」

呆れた。瞳がそう語っていた。

「バーロ、忘れるわけねーだろ。昨日だつて歩美ちゃんたちとパティイグッズ買つたんだから。・・・つてそーじゃなくて。俺が聞きてえのはだな。何でオマー、こんな時間にクッキーなんか作つてんだよ。タネだけ作つとけば明日でも間に合つだろ?」

よほど焦つたのか、唾を飛ばすぐらいの勢いで弁解するコナンに対し、彼女は小さく、あら、と言つてクールに笑つた。

「あなただつて他人のこと言えないじゃない。もうあまり時間が

ないとはいえる、子供がこんな深夜の夜道をうろついて自体、おかしいはずよ。よく警察に補導されなかつたわね」

「バーロ、ほど・・・」

補導されかかつたよ、ここに来るまでに3回も。

「コナンはそう言おうとしてやめておいた。彼女に一笑されるのがオチだからである。

「・・・?」

もちろん、哀は怪訝な顔をして彼を見ていた。

「そ、それより・・・」

「コナンはあわてて話題を変える。

「・・・わかつてゐるわよ。はい

哀は小さくため息をすると、ポケットから折りたたんだその白いものを取り出して、彼の手の平の上に乗せた。

白いマスク。

しかし、それはただのマスクじゃない。

一度だけ使つた、彼女専用の変声機。工藤新一と江戸川コナンはまつたくの別人であると  
いうことを、蘭に思わせるために博士が作つた、世界でたつた一つ  
しかない代物。

サンキュー、との手を引っ込めるコナンに、哀はじりつ、と彼を睨んだ。

「な、ナンだよ・・・」

どうもその目で睨めると弱い。

「・・・蝶ネクタイ型変声機を壊しただなんて呆れて物が言えな  
いわ。あなたならしくもない。あなたにとってそれは何においても一  
番大事なアイテムだつたはずじやないのかしら?」

哀はため息交じりにつぶやく。彼女のその言葉は今の彼にとつて  
は痛いものだつた。

「しゃーねーだろ? 蘭が洗濯機に入れちまつたんだからさ」

軒先に干されていたあの赤色の蝶ネクタイ型変声機の無様な姿が、

彼の脳裏に鮮やかに浮かんできた。

「コナンは決まり悪くなつて頭をぱりぱりとかいた。

「大切なものなら自分でどこかに置いたり、しまつたりするのが普通じゃないの？」

哀のいうことはじもつともである。コナンはわるかつたよ、と半ばふてくされた表情で呟いた。しかし、今日の彼女はいつも増して厳しい。解っているのだから言わなくてよいのに。じつまでして自分を苛めたいのか。

そう、確かに彼は蝶ネクタイ型変声機を壊していた。

それに気づいたのは、先ほどの園子が真と再会したあのパーティの会場でのことだった。

蘭が寂しそうな表情をしていたのを見て、コナンは『工藤新一』の声でクリスマスに蘭に電話するつもりだったのを、急遽早めて、イブの夜にすぐに彼女と連絡をとろうとしたのである。しかし案の定、水に思いっきり浸かった変声機はうんともすんとも言わず。。。

焦った彼は変声機をすぐさま直してもらおうと阿笠邸に電話した。そこに出たのは、哀。

コナンが焦心の気持ちでそのことを相談すると、「何なら私の変声機、貸してあげてもいいわよ」という、思ひもかけない提案が返ってきたのだ。

機械を直すには時間と体力がいるだろうから、博士が無駄なことはしなくともいいよ、と。

実際、それを直すのには調整などもいるため、丸一日はかかるといつから、コナンはもちろん彼女の厚意をありがたく受け取ることにした。

ところがでコナンはこんなイブの夜に、阿笠邸で、哀と少しも口マンチックではない会話をしているのだ。

「・・・大事に扱つてよね。また使うとは限らないけど、一応博士が私が便利なように作ってくれたんだから」

『私が便利なように』の部分を強く強調して言う彼女に対しても苦笑い。「一トのポケットにマスクを入れているのを見ながら、思わずジト目になつてその言葉を返した。

「わあつてるよ。これでもオメーにすげえ感謝してるんだぜ」

「あら、そやは見えないけど」

哀はそう言つて冷笑すると、それじゃ、と言つて内側のドアノブに手をかける。

「え、あ、おい」

「・・・急ぐんでしょ。もつすぐイブ、終わつちやうわよ。あなたを待つてる彼女のためにも、こんなところで無駄話しないでさつさとそれ持つてお家へ帰りなさいよ。・・・じゃあね、幸運を祈るわ。・・・ま、その場しのぎの幸運でしかないかもしけないけれど」捨て台詞のように、その言葉を残してドアを閉めかけた哀に、コナンはあわててノブをガツと掴んで、その手を止めさせた。

「待てよ、灰原」

「・・・何」

哀は突然ドアを閉めようとした手を止められて、少し面食らつたような顔をした。

「まさか、これ使うから電話を貸してくれだなんて言つんじやないでしょ? い・や・み?」

「違うよ」

「ナンは思わず苦笑する。それから、コホンと咳払い。

「おめーは、ちょっとぐらいいづの夜に期待とかしたりしねーのかよ」

「期待?」

眉をしかめて、怪訝な顔をする。何を言い出すのだ、この男は。そう曰が語つていた。明らかに不信がついている。そんな相変わらず

な彼女に思わず苦笑しながらも、言葉を続けた。

「そう。年に一度の、この聖なる夜に何かが起きるんじゃねーかっていう期待」

彼は彼女に対して頷いてみせると、歯揃えのいい白く輝く歯を見て笑つた。彼女の怪訝そうな表情は依然変わらない。

「何が起きてるって言うの？まさか死んだおねーちゃんが生き返るとかそんな奇跡が起こるっていつの？？」

「・・・いや、それはさすがに無理だけど」

それが彼女にとつて一番いいことには違いないけれど。もちろん、彼女はそんな答えをはながら期待していなかつたようで、小さく「そうでしょうね」と呟いた。

「あんなあ、・・・いちいち俺の話にチャカスなよ。人の話もよく聞けってーの」

さすがにいらつとしたのか、明らかに不機嫌になってしまった彼に対して、哀は社交辞令のように「わかつたわ、聞きましょう？」と言つた。

まったく今日に限つて、扱いにくい。今日はどことなく不機嫌であつて。それが何だかは解らないけれど。苦笑いを浮かべつつも、彼はどうにか自分のテンポに持つていこうと、笑顔を作つた。

「知ってるだろ？・・・今日はクリスマスの前の日。クリスマスイブだぜ。たとえばサンタクロースだと、そいつが子供の姿であるおまえの元に現れたりすることだってあり得るわけだろ、そしたら・・・」

哀はふつと笑つて、ああ、とつぶやいた。

「それがあなただつて言つつもり？・・・だけどあなたサンタの格好も全然してないし、大体、明日のプレゼント交換でのサンタ役は博士に決まってるはずよ」

呆れた表情で自分を見つめる彼女の視線に、コナンは

「まあ聞けよ」

と笑つて制し、かばんから「レモン」と綺麗に包装された紙袋を取り出す。そしてそれをそつと彼女の小さな手に握らせた。

「メリークリスマス、灰原」

と呴いて。もちろん、哀は驚いた表情で彼から渡された包みを見つめる。

「・・・何、これ」

少し戸惑った顔で自分の顔とその包みを何度も見比べている哀の様子に、コナンは思わず微笑んだ。

「プレゼント交換とは別に、おまえに渡したいものがあつても。

昨日、歩美ちゃんたちと買い物してる途中で見つけたんだ。・・・

おまえに似合ひと思ひや」

「『似合ひ』・・・?」

哀は表情を変えず、ようやく墨線を紙包みに落ち着かせた。そしてその包みを丁寧に開ける。

中身は　白い耳当てだった。

ウサギの顔が耳の部分についた何とも子供チックな、キャラクターモデルのウサギ。

哀はしばらく間を開けて、無表情でこいつを眺めた。

「何、これ」

先ほどと同じセリフ。しかし明らかにその言葉の内容は違かった。明らかに不満の色を出している。この話を振る前よりももつともつと機嫌が悪くなっている。そんな気がした。

先ほどはそんな表情を少しも出さなかつたが、もしかしたら結構その中身に期待していたのかもしれない。もちろん、指輪とか高価なものを探していったわけではないだろうが。  
きっと、この『アニメチックな顔のウサギ』と耳当てというアイテ

ムが問題なんだろ?な、コナンはそう解釈した。そしてあわてて弁解する。

「ほ、ほら。この前アーマルショームmandoで行つただろ?そんときオマー、ショーのメインアーマルだつたホワイトライオンのストラップ買つてたから」

「ああ、レオンの」

哀はひんやりとした田線を耳当てに置いたまま、彼に相槌を打つ。そう、と彼は頷いて見せた。

「そんときのオマーすげえ嬉しそうなだつたから。本当はオメーそういうの好きなのかなと思つて。それにこの格好だつたら絶対ジョンたちにバレねえって」

「だからつて・・・」

明らかに不満げである。

体は子供だが、心は18歳の大人。恥ずかしくてこんなの付けられない、といいたいのだろうか。これが、特別にプレゼントするためには時間をえてまでの代物なのだろうか。  
もしかしたらそう思つているのかもしない。それとも、もっと別のことでも考えているのだろうか。コナンはあえてそのことは深く追究しないことにした。

「まあ、つべこべ言わねーで付けてみるよ」

「ちよつと・・・」

「いいから」

コナンは強引に手を伸ばすと、彼女の手から耳あてを取り、そつと彼女の耳に装着した。それからバンダナつけているのを思い出し、慌てて頭からそれを抜き取る。そして彼は両手を組み、満足そうな顔で、よし、と呟いた。

「・・・似合うぜ、とっても」

「・・・誓めてるの？」

ジト目で哀はコナンを睨む。

怖い。

思わず引きつった笑みを浮かべる。

「ほ、ホントだつて！つたくしつけーな。おまえに似合わねえと思つなら、俺はそんなの買わねえよ！」

その言葉に、哀は一瞬ぎょっとした顔をして彼をまじまじと見つめた。その後で彼女はようやく、ぎこちなくだが、そつと耳あての感触を手で触つて確かめた。

ずつと、黙つたままで。

「・・・何とか言えよ」

その沈黙に耐え切れず、コナンはとつとうそつしつ『ハリ』を入れた。哀は一度耳あてを外し、手でもてあそびながら、

「嬉しいのか、嬉しいのか微妙なところね・・・」

「おい・・・」

「嘘よ。ありがとう、私が子供のとき、組織から『えられた服しか着なかつたから・・・興味あるわ」

「『興味』ねえ」

コナンは不満そうに呟いた。結局のところは氣に入つたのかどうなのか。哀はそれ以上何も言わずにくすりと笑うと、玄関にある銀色の壁時計をちらりと見て、ちょっと待つて、と早足で再び家中に入つてしまつた。コナン一人を残して。

「お、おい。灰原？」

「コナンはあわてて腕時計に目をやる。時間はあまりない。彼女は何をしようというのか。

2、3分の間、彼は時計を見ながらその場を行つたり来たりしていた。

鈴木邸でパーティを終えたあと、部屋にこもりつきりだつた蘭のことが気がかりで仕方が無かつたのだ。また、泣いてはいないだろうか。彼はそわそわと時計を気にしていた。

「まったく、何やつてんだよ、あいつは……」

「そりゃいた時……。

「おまたせ……」

パタパタとしたスリッパの音に、コナンははつとして振り返った。彼女は手にあるものを持って彼の目の前に立っていた。

「・・・？」

「メリークリスマス、サンタさん」

哀はそう呟いて、そつとそれを彼の前にさし出した。それは温かいミルクと、クッキー。

驚いて目を丸くするコナンに向かって、哀は言葉を続けた。

「知ってる？子供たちはサンタさんに、プレゼントをもらつたお礼にこれを用意するんですって。あつちにいたとき、クラスメートがそう言つてはしゃいでいたのを思い出したの」

「え・・・、これを俺に？」

面食らつたような顔でコナンは哀を見つめた。

「・・・耳当てのお礼よ。・・・少なくとも今だけはあなたは私のサンタさんではあつたから」

哀はそう言つて彼から逃げるように視線を逸らす。頬をほんのり紅くそめて。

「・・・灰原

コナンはしばらくの間、彼女の横顔をじっと見つめていたが、ふつと嬉しそうに表情を緩ませて、サンキュー、と呟いた。それから彼はそつとそのクッキーが何枚か載せられた皿に手を伸ばす。それをゆっくり口の中にほうばる。

甘くて、おいしいクッキー。優しさと愛情が込められた手作りのクッキー。

1つを食べきり、2つ目に手を伸ばしたとき、コナンははたと気づいてその手を止めた。

「まさかオメー、これを俺に食わせるつもりでこんな夜遅く・・・

「う、己惚れないでっ。言つたでしょ？あなたがサンタさんになんてならなかつたら私だつてクッキーをあなたにあげるつもりなんてなかつたし。だ、大体こ、これは試作品だったんだから！」  
彼女は珍しく動搖して、一気にその言葉をまくし立てた。

「試作品？」

怪訝な顔をしてコナンは哀の顔を覗き込む。

「そ、そう、明日の焼き具合を見る試作品よ」

哀は動搖を隠せないのか、まだ上ずつた声のままで。

そんな彼女の様子にあまり気にかけることもなく、コナンは試作品ねえ、と言つてクッキーをじろじろと見ながら苦笑した。

「何ならこのまえの文化祭のとき使つた、APT-X4869の解毒剤の試作品くれよ。そしたら

「嫌よ」

即答。

「言いつと思つた」

コナンは思わず笑つた。

大体彼はその試作品をまた手にすることを期待してなかつた。  
もう、彼女があの薬をくれるとも思つてなかつた。

クッキーをほおばりながら、つんとした表情の哀を見て思わず苦笑い。それから温かいミルクをそろそろと喉の奥にゅっくり流し込む。体がぽかぽかと温まつてくる。

甘くて優しい味がした。

「美味かつたよ、サンキュー」

彼は全てをゆっくり味わつた後、空になつた皿を彼女に渡した。

それを受け取りながら哀はふつと口元に笑みを浮かばせ、

「こちちらこそ、ありがとう。小学生を演じるには必要なアイテム

を

「・・・何か引っかかるんだよな、そのセリフ」  
コナンは思わず首をかしげた。それからひょいと玄関の縁石から降りると、

「じゃあな。・・・マスクありがとな。風邪ひかねえように、厚着して寝ろよ」

「子供じゃないんだから大丈夫よ。あなたこそ、油断して警察に補導されないようにね」

「コナンはその言葉に、ははは、と思わず苦笑する。本当に洒落にならないだから。彼はポケットにマスク型変声機があることを確認すると、

「それじゃまた明日な」

と笑顔で言った。

「おやすみなさい・・・

哀が答える。

「本当にありがとな・・・」

「コナンはそう言つと、小ちくじやあ、と呟いて阿笠邸をあとにする。それからそつと白いウサギの耳当てをつけたみた。

く。

みるとみるうちに小さくなる女の後姿を見て、哀はふつと小さく息をつく。

少し寂しさ、切なさを帶びたその表情で。

それからそつと白いウサギの耳当てをつけたみた。

「・・・あつたかい

彼女はポツリと呟いた。

。

## HANSHIN-DO ① (前書き)

この話は新作書を下ろします。快晴です。かなりドキドキしています。感想お待ちしております。

その美しいすぎる満天の星空を、その少年はヘリコプターの中で見ていた。

頭には白いシルクハット。瞳にはアンティイークなモノクル。白い手袋に、マントにタキシード。すべてを白で固めたその少年は、そんな自分が窓ガラスに映つて思わず悲しく微笑んだ。

もうすぐ時刻は「クリスマス・イブ」から「クリスマス」に変わることになる。

機内には自分と、そして自分を「ぼっちゃん」と慕う老人と。

これを愛しい彼女と眺めることができたら。

モノクル  
片眼鏡越しに一人空を見上げる彼女のことを考える。

そう、先ほど出会ったあの、名探偵の大切な人のようだ。

「・・・ぼっちゃん？」

運転席から心配そうにその老人が尋ねた。口数がいつもより少ないので心配になつたのだろう。

「・・・なあ、ジイちゃん。今日の仕事、どう思う？」

「どう、とは？」

「何パーセントの出来、かな？」

「・・・ぼっちゃんらしくありませんな。そんな後ろを振り返ることをして」

真正面を見据えたまま、安全運転を続けたまま、老人は少しだけ首を傾げた。皮肉を言つているのではなく、本当にわからない、といった様子で。

「・・・いいから答えて」

「・・・それじゃあ僭越ながら言わせてもらいます。今日のぼ

つちやまの、出来具合は・・・・65パーセント、ですな」

「・・・ハツ。・・・ジイちゃんにしてはずいぶん辛口だな」

思わず鼻で笑うしかなくて、その白い衣装を身に纏つた若い男は目線を運転席に座っているそのジイちゃんと呼ばれた男を見た。

「んで、その理由は？」

「あの美術館であなたが起<sup>こ</sup>した行動としては、95パーセント以上の出来だとは思いますよ。その華麗な仕事振りには天国にいるお父様もきっとお空の上から田を見張られていることでしょう」

「・・・天国ねえ・・・」

本当に黒羽盜<sup>おやじ</sup>一<sup>は</sup>は天国にいられているのか。何の理由が多くの宝石を盗み、人を騙し、息子を騙し。それが正当な理由があつたにしろ、・・・盗みという罪を犯した。これだけは変わらない。犯罪に手を染めているのは変わらないのだ。

そして自分も

白い装束はすでに親子二代に渡る罪の色に染まつてゐる。

「ほつちやま? 何を考えているんです?」

心底心配そうに運転席のその老人は若い男に尋ねた。否、彼にはわかつっていたのだろう。だからその考えを止めるためにその言葉を投げかけたのだ。そう若い男は解釈した。

「いや。・・・んで? 何でそれが65パーセントになるんだ?」

わざと陽気に高らかに声を上げると、老人はふつと小さく笑つた。

「わかりきつたことです。・・・あなた様の鳩がどんな遠くまで行つても寄り道せず自分の巣に戻つてくることを躊躇<sup>どなた</sup>したのは一体、何方と何方でしたかな」

暫しの間のあと、その若い男は、僅かにその頬を引きつらせた。

「寄り道はいけません」

何もかも悟つたようなその言い方。そんな彼に対し、若い男は、

「まったくジイちゃんにはかなわねーな」と呟いた。

「・・・けど、もう少し持ち上げてくれてもいいんじゃねーか?」

「私は何時なるときも、レディの味方ですか?」

「そう、彼の名は。今、世間を賑わせている、華麗なマジックで人々を惑わす紳士的な怪盗。

決して人を傷つけない。決して人を侮らない。

そう、彼の名は。

怪盗キッド。

しかし、それは仮の姿であって。彼の本来の姿は普通の男子高校生、黒羽快斗。

それを知っているのはごく限られた人しかいないのだけれど。

「23時49分、か

キッドは腕に嵌めた、その服装に見合ったアンティークな腕時計で時間を確認し、小さく嘆息した。

全ては自分の軽率な行動によって起こったこと。思わぬアクシデントが重なり、それで時間がどんどん加算されていて。予定では22時を半分ほど過ぎたくらいの時刻でもとの姿に戻つて彼女の前に再び現れることができるはずだったのに。

ファンファンと遠くでヘリコプターを追うその音を聞きながら、彼は遠い田を浮かべた。キッドではなく、黒羽快斗として。

今年は恵子の家で行われたクリスマスパーティー。誘われたみんなが料理やお菓子を持ち寄つてできたアツトホーム的なパーティーで。それは前々から企画されていたことであつたが、それ以前に今日の仕事は計画されていた。

クリスマスイブ、クリスマス、のこの2日間しか置かれてないその宝石「祈りの女神」をどうしてもこの目で見て確かめたかった。パーティに少しでも参加して、クリスマスに彼女と過ごせばそれでいいと思っていた。

けれど。

『あの後の中森さん、さびしそうでしたわよ』

先ほどの言葉が耳につく。

自分と幼馴染である青子は、あの工藤新一<sup>めいたんじ</sup>と毛利蘭のように、何ヶ月も会つていらない仲ではない。けれど、少しでも一緒にいたい関係に自分と彼女はいて、それを素直に表現できない。

クリスマスパーティを終え、一人家に戻り、あの少女のように誰もいない家で。空っぽの家で、暖房の効いてない寒い部屋で空を見

上げて いるの だろ。自分を思つて。  
あの少女と、青子の姿がリンクして。

「くそっ・・・」

そのとき。

ズズズというバイブルーションにはつとまる。  
いつも自分の証拠を残すこれだけは皿に置いておこうと一度は  
思うのだが、なぜか離すことができなくて。すぐにでも彼女と連絡  
がとりたい。そういうかで思つて いるからかもしだれないけれど。

表示は、やっぱり中森青子。大切な幼馴染からだ。

「・・・・・よお」

「青子だよ。・・・今、どこにいるかわかる?」

「え?・・・おまつ、こんな夜中にまさか外出してんのかつ!?

もつすぐ12時だぜ?!

思わず電話を握り締め、彼は素つ頓狂な声を出してしまつた。  
若い女の子が、こんな夜更けに。いつたいどんな悪い男おおかみがいるか  
わからぬといふの!。

「うん、だつて・・・。キッズのせいでもまだお父さん帰つてこないし

「だつたら・・・早く寝るよ!」

「だつて・・・快斗、恵子のパーティにいたはずなのに、いつの間にかいなくなつちゃつて、こんな時間まで帰つてこなくて。電話もなくて・・・」

すすり泣くその声に、胸が軋む。

「つたぐ。俺も人のこと心配する前に自分のことやれつ一つの  
・・・え？」

ひつぐ、ひつぐとすり声をあげながら、青子は闇を返す。しかし、そんな彼女に対して、こや、いじらのじただ、と少く笑った。

「・・・・・動くなよ?」

一  
え?  
「

「お前がクリスマスに行きそうな場所くらい、見当ついてんだから。・・・待ってるよ、すぐ行つてやつから。ジングルベルの鐘が街中響き渡る前にな

暫しの間の後、電話口で青子が小さく笑う声が聞こえた。

「向かヰツデアタハで感じ難ハズ

「何だそら」

むすつとして答えると、青子はその反応にカラカラと笑った。

「・・・けど、快斗の方が全然かっこいいよ。・・・青子を見つ

「…・・見つけたね」

「・・・見つけてやるよ、今すぐにな」

キッドはそう咳き、電話を切るや否や、ヘリコプターから、イルミネーション見える街に向けて、大きくダイブした。

大切な、  
中森青子おたから  
が居ある、その場所へ。

## H派ソード2 (2)

「待ってるよ、青子。・・・すぐ迎えに行つてやつから」

・・・もう、一人にはさせない。

ヘリコプターから東京のイルミネーション輝く街に向けてダイブする。

降下していくからだを襲うのは、凍てつくような冷氣を纏つた風。頬をびくんびくん叩き付けるが一度も動じることもなく。

バッ

パラグライダーを広げ、そこで自由に風をものにする。  
こぞ向かうは青子おたからが待つ、あの場所へ。

彼が降り立ったのはとある古びた惣菜屋の裏。  
米花市の隣にある、そつ、彼ら・・・ 黒羽快斗と、中森青  
子が通う高校のすぐ近くの。その店のすぐ後ろの草むらに体を隠し、

白のシルクハット、タキシード、手袋、モノクル。すべてを一瞬にして解いて、一人の『黒羽快斗』に戻る。

そして、目の前に残るは白いハンググライダー。それをずっとその形のまま、持っているわけにはいかない。けれども、そこに置いていて誰かに見つかるわけにもいけない。

落ち葉に埋もれさせるわけでもない。だけど、決して見つからないようにちょっとしたマジックをかけて。

そこに現れたのは、一台の自転車。白ではなく、赤の自転車。彼はそれを見て、ふつと小さく笑みを浮かべた。そしてサドルに座るとペダルに足をかけ、最初の一漕ぎをするために、足に力を入れた。

+++

彼はその場所に向けて自転車のペダルを漕ぎ続けていた。

空から降りてきたときの風の冷たさとはまた違う感覚で、その冷気は自分の頬に体当たりしてくる。手袋なしのハンドルを持つその手は凍てつくようにならざる。

けれど、前に進むしかなかつた。そこに、自分を待つ彼女がいるのだから。

雪が降る前に、クリスマスイブが『イブ』ではなくなる前に。

彼女に会いたかった。

そして。

「…………やつぱり」

自転車を止め、彼はほつと安堵の息をつく。そのとたん、白い息が辺りにぱつと立ち込め、一瞬だけ田の前にいる人物の顔を霞めた。

江古田市にある、明かりどころか人気もない、尚且つ工事用具がそのまま置かれていたその大聖堂の廃屋の前で、手袋を頬にあて、寒さを凌ぐつしているその姿。

そこには、『幼馴染』であり、自分にとつてはそれ以上の存在である、彼女。 中森青子。

白いダッフルコートを身を纏っているが、それでも寒さは凌ぐことができないらしく、時々ぴょんぴょんと飛び跳ねたり、あつちへ行つたり、こしちへ来たり。

そんな落ち着かない彼女に、快斗は思わずふつと噴出した。

「…………あ！」

その声の方に視線を向け、ようやく彼の存在に気づいた青子が思わず声を上げる。

「快斗……」

「よつ。……遅くなつちまつた……。悪かつたな」  
わざとおどけた表情をして、彼女の前に立つと、すぐに青子はこつこつ微笑んだ。

「…………やつぱり、来てくれた」

その無邪気な笑顔によつやくすべてを悟る。

ああ、自分は何もかも間違っていたんだ、と。

## HARIO ハリオ (2) (後書き)

間に合っちゃうです。この話。わーい、皆さんメリークリスマスー

vv

## HANNA (3) (繪書き)

あたし、キリスト教の学校に2年ばかり通つてました。いや、洗礼を受けているわけでもなく。

なのでひとつ間違つてゐるよ、って思つても田舎つてくだら・・・。

^ ^

## HAPPY END (3)

約束なんて、無効になることもあるだらう。

とある事情によつて、適わないことだつてあるはず。

二人が願つてもどうしようもない事情によつてできなくなることだつて。

でも、自分には理解つていた。  
わか

彼女がまたこの場所にあらわれることを。

だつて・・・。

+++

それは去年のイブの日。

青子の家で行われた初めてのクリスマスパーティー。  
客人たちが帰つたあと、快斗と青子はほんの少しだけ一人だけのクリスマスイブの時間を過ごした。

それは、酔つ払つた彼女の父親を引き取りに、江古田駅に行くだけの道だつたけれど。

寒さ凍える夜道を二人はのんびり歩きながら、一人は特別な夜を感じていた。

いつもと同じ道のりも、青・白・ピンク・黄色。色とりどりのイルミネーション・ライトに照らされ、キラキラ輝いていて。

「綺麗、綺麗」とまるで幼い子供のように騒いでいた青子に、いつもの憎まれ口を叩きながら、そうやってその道を歩いていた。

そして、

そこで2人はあの場所にたどり着いた。学校の近

くの、その教会に。

いつもは決して門が開かないその教会に。

『快斗つー見て、この教会、入れるみたいだよー・・・。』  
興味津々と/orのように青子は快斗のダウンジャケットの裾をくい  
くいと引っ張った。

『そりやクリスマスだかんな・・・』

普段、平日は素通りしてしまうその教会。けれど、クリスマスとい  
う言葉は人の心情を動かしてしまったらしい。

『お気軽にどうぞー、だつてえ。快斗入る?』

強引に引っ張るその彼女の気持ちに負け、そのまま教会の中に引  
き摺り込まれた。

重い扉の向こうには2人が今まで見たことのない世界。天井には  
絵が描かれ、そこには天使が舞い、羊がいて、羊飼いがいて。学者  
がいて。・・・そして真ん中に立つのは、マリアとヨセフ。そして  
抱かれているのは、小さな赤ちゃん。・・・そう、キリスト誕生が描  
かれたその天井画。

アンティークなライトにとても大きなパイプオルガン。

何もかもが新鮮で、青子は目を爛々と輝かせて。キャンドルに囲  
まれたその部屋の中で何度も「すばらしい、すごい!」と叫んでいた。  
その迫力に、思わず気圧されて、「早く帰るぞ!」なんてその細  
い手首を掴んだそのときだった。

『・・・よひこむ。・・・いらつしゃい』

気配もなく。その声が聞こえるから、快斗はぎょっとして青子の  
前に腕を翳して守りながら振り返った。そこにいるのは、60歳ほ  
どの恰幅がいい異国の牧師であり、そしてその隣には30歳くらい  
の日本女性。親子とも見えるそのカップルが自分たちに向けて人の

好さそうな顔でにこやかに笑っていた。

その笑顔に、そのいるだけで温かい雰囲気に、すぐに警戒心は溶けてしまつ。

『礼拝も終わつた後でもう誰も居ないけれどゆつくりしていきなさい。ここに来てくれたのは、きっと神の思し召おぼめしながら』  
そう言つて差し出されたのは暖かいミルクと、小さな籠に入った一口サイズの紅茶のケーキ。もう時刻は10時過ぎだというのに、一向も閉める気配もなく。来る客も拒まず、静かに笑つて迎えてくれる。

『ここはわれらが主イエス様イエス様が生まれる日を祝うために夜通し、明けておくのです。いつ誰がここにきて私たちとお祈りしていただいてもよいように。あの日、羊飼いや学者、森の動物たちに見守られながら、馬小屋で神のご加護によって生誕されたように……。だからいつでも来ていただいてよろしいのですよ』

そう温和な笑みを浮かべて言つた牧師。

来年も行こう。来年は、イブがイブでなくなるまで、そこで過ごそう。

そう2人は約束して、その牧師夫婦と別れた。

けれど……。

今年の5月、牧師夫婦は海外へ出かけようとしたその矢先  
空港へ向かうその車の中で、命を失つた。  
わき見運転の玉突き事故に巻き込まれて。

彼ら夫婦と親しかつた牧師が、その教会で葬儀を開いたとき、ミサの曲が流れたとき、青子は快斗の胸の中で号泣した。

一度しか出会わなかつたのに。

話したのはほんの15分も満たなかつた程だつたのに。  
こんなに胸が締め付けられるのはなぜだろ？

『もう、行けなくなつちやつたね』

すべてを終え、2つの棺が墓に運ばれるその様子を遠田で眺め、  
青子は鼻を啜りながらぼそり、と呟いた。そんな彼女の肩を、居た  
堪れなくなつて、快斗はそつと抱いたのだった。

あれから数ヶ月たつた今。

貰い手も見つからないその教会は1月には取り壊される、そうび  
こかで聞いた。

けれど、青子には言わなにようにした。またその小さい胸を痛ま  
せるには忍びなかつたから。

あれ以来この教会の話は極力避けていたし、通り道もえていた。  
12月になつてもパーティの話はしてもこの教会の話は一言も出  
なかつた。もちろん、青子の口からも。

なのに。  
彼女が現在いよいよいるとわかつたのは・・・。

きつと彼女が優しすぎるから。纖細すぎるから。そしてあの牧師  
夫婦があまりに暖かすぎたから。

忘れられない、人だつたから。

誰もいなくなつたこの場所で、きっと一人空を見上げてる。  
黒羽<sup>オレ</sup>快斗のことぢやない、もちろん、キリストのことでもない。あの心優しい牧師夫婦のことを祈つて。

そう思えたんだ。

## ペソード2 (4)

「忘れちゃったのかと思つたよ」

一人あの日の追憶に浸つている快斗の横で、縁の布で多い匂くされたその大聖堂の前に立ち、青子は苦笑ともほにかみとも取れる笑いを見せた。

「あんまり悲しくて、泣いちゃつた」

それが電話の向こうのあの涙の理由か、と、思わず脱力する。

「バーロ、忘れるわけねーだろ?」

ただ、避けてたから。

ここに一人でまた来る」とは。

あの二人を思い出すのは、青子の涙を見るのが辛すぎるから。

そう、弱いのは自分。

逃げることなんて誰より嫌いなはずの自分が、一番逃げていた。そして、誤解していた。あの二人と同じように、クリスマスイブに会えない自分のことを思つて泣いている、そう思つていたのに。全然それは間違つていて。

「見直したよ。・・・強かつたんだな、意外と」

快斗がそんな憎まれ口をひとつ叩くと、青子は小さくため息をついてみせた。そして、笑顔を作る。

「・・・強くないよ。・・・ただ、すべてが壊されるその前に。・・・青子は、あの牧師さんたちにもう一度ここで会いたかったの。・・・サヨナラを言いたかったの」  
ぐすん、と鼻を少しすすると、青子は潤んだ瞳を隠そうとするかのように空を見上げた。

そんな彼女を思わず片手で引き寄せ、自分の胸に押し付けた。

今、目の前の優しい彼女がすごくとおしくて。

そして、そんな大切な彼女を泣かせた牧師夫婦を少し恨めしい。

「ちょっと、何、快斗！くるしつ・・・やめてよーーー！」

じたばたする青子に、それでも離そうとはしなかった。

叶うなら一度だけでいいから、またあの夫婦に逢いたい。  
ゆっくり青子と話をさせてやりたい。

神というものが本当にいるとするならば、神に忠誠を誓った夫婦  
と天国なら連絡が取れたりもするんじゃないだろうか、なんて子供  
じみた考えも浮かんできてしまつ。

「・・・ね、離して。・・・快斗」

そつと青子が頬むから、ようやく快斗は彼女を抱きしめる手を緩  
めた。

青子はそつと快斗の腕の中から抜け出すと、鞄の中からいそいそ  
と水筒とタッパーを出して。タッパーを開けると、一口サイズの紅  
茶のケーキ。旨そう、と手を伸ばしかけた快斗に、青子はやんわり  
と「だめ」と言った。

「・・・快斗にあげるんじゃないよ？2人に。・・・そして、同  
じようにここに来てくれた人にあげるの。・・・牧師さんの奥さん  
が作ってくれたケーキには足元にも及ばないだろうけど」

「・・・家帰つたら俺の分もあるんだろうな？」

口を尖らす快斗に対し、「もちろん」と優しく微笑む。いつも  
と違う大人びた青子に対して、快斗は思わず惚けてしまつ。

自分の知らないところで、青子は確実に成長していた。

それが嬉しくもあり、寂しくもあり。・・・なんて父親みたいな

ことを言つてみるけれど。

「 リーンゴーン、リーンゴーン …… 」

一人の思い出の時計塔が午前の時を告げる。

この聖堂で初めて過じる25日の日。そしてそれは終わりにもなる。

25日を中に入つて迎えることはなかつたし、その夫婦と迎えることも決してなかつたのだけども。

ただ、それでも2人はとても満足していく。しかし、ここに2人でいられたことに。同じ思いでいられたことに。

きっと天国のどこかで自分たちを見守ってくれると思つかう。青子の作った紅茶のケーキを食べてくれると思うから。だから

「 メリークリスマス 」

快斗は2人の冥福を祈りながらほんのすこしだけ私情もお祈りする。

また来年も青子と過じせますよ。そして関係がすこしだけ進歩していますように。

そしてその願いは、きっと・・・。

## HANSARD 2 (4) (後書き)

これにて、聖なるはお話終わりですー。  
ありがとうございました。

とうあえず、あたしも、イブ中に終わることができよかったです。  
今日は素敵なイブを、大切な人と過ごすことができましたか?

明日も貴方にとって、素敵な日ありますように。  
メリークリスマス!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2403b/>

---

聖なる夜は君と・・・

2010年11月14日14時27分発行